

丙子雜俎

五

昭和十一年四月下旬起筆

特別
14
1919
476



丙子雜俎

昭和十一年四月下旬起筆

日英四の外相のちつとグレイ子爵のあつと多うたがま
 じ外相の親中米四駐北米の英大代傑イリスから
 英の外務省の信考が来た。リリス極うと、ルリスの工
 ルト大役領の國務と好くと閑地を就いたの、阿弗
 利かに海、吹羅巴も浸おを志し、英も、訪問
 する事と多うたが、ルリスは鳥考を聴く、改味があ
 り、英四と訪問の横今、鳥考を聴き、此の
 んるのキ、巧者の案内を今、風一と置いと世
 といといと多うたことを言ふて来た、グレー外相の此の



留置の、これとま、あつと多うたがま
 四十、あつと多うたがま、あつと多うたがま
 那古、あつと多うたがま、あつと多うたがま
 あつと多うたがま、あつと多うたがま

あつと多うたがま、あつと多うたがま
 あつと多うたがま、あつと多うたがま



年月、あつと多うたがま、あつと多うたがま
 あつと多うたがま、あつと多うたがま
 路の、あつと多うたがま、あつと多うたがま

あつと多うたがま、あつと多うたがま
 あつと多うたがま、あつと多うたがま

書代をえて、宛から鳥のあめをよめることが公認の一端に
もあつかひのやうに、外相の巧みのある人にと物もよめる
まもよろしく自分があるのをまつとめるとさ(む)と見るとし
の、あつかひのあること、米國のたる英大使もあ
めをよめて得ておられること、あつかひが、實にグレイ
外相の趣味の人び、釣の名人があつたこと、隠れもある
こと、釣を聞て、若くも海流してあつたこと、多くの
人が知つてあつた、あつかひ釣のむもよめる、鳥を就せり
うく、進言があつたこと、自から進言のあること、任を
自信のしる、あつかひ、客は人が政治家にあつたこと、か
ろく、常を公けのこと、折衝の關係があつたこと、
もろく、全く個人的趣味の問題として、外相の案



中投と引受けし所、鳥の趣味のあつたこと、ルースウエルト
は、日程もつ、英、わつと来た、利の安、欲(む)が、空
人が英、む、客、人、う、寸、取、を、延、つ、ろ、い、ち、を、能、待、則
ト、の、案、を、物、あ、れ、が、此、の、あ、め、の、あ、め、の、研、究、を
忘、れ、る、ろ、う、れ、あ、れ、ル、ース、ウ、エ、ルト、は、幼、道、の、執、心、家、に
或、る、日、を、つ、り、研、究、に、あ、つ、た、る、人、を、將、して、從、者、も、付
い、す、或、る、日、を、つ、り、出、す、け、た、グ、レイ、予、り、お、客、が、い、ん、不
と、鳥、を、就、せ、智、識、が、あ、つ、た、か、き、ん、多、く、こ、と、も、あ、つ、た、い、り、
ら、或、の、日、を、つ、り、ま、じ、く、し、を、退、屈、を、求、め、て、ぬ、い、り、
心、算、に、あ、つ、た、り、も、わ、る、比、が、進、む、鳥、の、執、心、を、能、く、し、る、及、ん
び、ル、ース、ウ、エ、ルト、は、其、の、執、心、を、直、ち、鳥、の、あ、つ、た、こ、と
を、判、する、の、あ、つ、た、い、り、お、客、を、鳥、に、就、せ、た、あ、つ、た、い、り、

ことを知りてあるを、彼等が知ることか、知し子守りな
ル。ルーヴラントは今の歌をやみくも不思議な訓練あり
耳の所有者の、放棄中が、グリーチル死田か、北路の
歌が、たんと三四の鳥が一羽も飛つてゐるを、ルーヴ
ハークを、遠くを、区別することか出来、一度やくと、意
他の、高き、向し、歌を、ましく、と、直ぐ、何鳥か、あると、言ひ、
るは、鋭敏び、ある、つ、多、く、の、島、歌、を、聴、き、む、の、感、心、
に、歌、手、の、グ、ラ、ウ、ク、ホ、ル、ド、の、あ、る、と、さ、ふ、れ、と、あ、る。英、古、の
ハ、ン、ズ、の、詩、帝、の、シ、メ、の、念、を、あ、る、の、れ、ルーヴラント
か折低をつけたら、歌が、こう、さ、の、と、さ、の、月、且、か、ら、ひ、あ、る
た、を、飛、か、斯、く、以、次、と、離、れ、を、別、天、地、に、改、味、の、お、ひ、て
一、口、を、あ、り、し、ル、こ、の、の、の、り、類、例、の、さ、の、お、ち、り、い、い、こ、の、

録

ある。も、の、の、の、の、(の、の、の、の、) の、道、は、の、が、あ、る、
た、ん、と、所、が、あ、る、の、う、い、う、に、さ、る、こ、を、も、の、の、の、の、の、の、
の、い、ま、の、サ、ツ、ボ、ン、を、ま、さ、り、り、勝、を、直、す、る、お、も、を、海、の、
に、橋、も、つ、か、附、帯、の、の、あ、る、さ、る、を、北、路、の、の、が、し、り、子
守、の、時、の、大、使、の、の、の、ン、と、折、衝、す、る、の、臨、の、金、種
大、使、の、の、の、(の、の、の、) の、海、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
ルトの、母、親、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
ヒ、ヨ、ン、(の、の、の、) の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
臨、ん、で、あ、る。以、上、の、其、の、概、略、の、の、の、の、の、の、の、の、

春城會の記

紫安新九郎

春城會の例會は、三月廿一日の夜、芝公園の紅葉館に開かれた。春城會は春城、市島謙吉翁を壽きその清福を望むの會である。例年二月翁の生誕日に開くのであるが、本年は逐鹿戦に數名の同人が立候補し、またそれに走せ參ずる者もあつたので三月となつた。翁の還曆も古稀もその祝宴はこの紅葉館であつた。翁は本年喜の字にあたる、前に因んでこゝで開かれた。私は翁が近頃酒と煙草を廢せられたと聞き、これは好くない、多年の愛用を一朝にして止めることは、必らず身體に變調を來たすであらう、これは翁に警告せねばならぬと意氣込むて出たのであるが、翁は飲まぬ吸はぬてはなく、節せられたのだと聞いて安心し

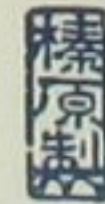
た。

宴席の扁額に『紅葉館、春城老客』とあるのを見て、春城公はここにも遊ぶのだと云ふものがあると、こゝは云ふに及ばず、柳暗花明の境に公の馬蹄の跡を殘さぬ所があるものか、その當時は自動車はないのだから、堂々と二頭立の馬車を横着けにしたものだ。それはあな勝ち公ばかりでもない、貴顯紳縉と云はれた連中の遣り方は大抵、その通りであつた。春城公のは殊に喧傳せられたのだが、公のやりかたは、何となく朗かて罪のないものであつたと辯護するやうな口を利く者もある。かゝることに就けても當時の世相の和やかであつた情勢も偲ばれる。列席の同人には、翁の揮毫と最近の著書が抽籤で配られた。酒漸くたけなわに、耳は熱する頃に、大江乙亥門君は起つて左の漢詩を朗吟した

市島子謙の高田に行くを送る

子謙贈は大にして氣は雄なり、決然袂を振つて將に遠く行かむとす、酒は三杯にして歌は三疊なり、折柳それ別離の情を如何せむ、知る君は野性にして羈すべからず、焉ぞ能く身を屈して青紫を把らむ、知る君は久しく屠龍の劍を抱く、一たび揮つて試みに裁斷せよ、路に横はるの豺狼と虎兇とを、同窓嘗て講ず泰西の文、才子群中最も君を推す、丈夫は畢竟瓦全を耻づ、奮つて清明の爲めに奇勳を策せよ、長風萬里短髪を吹く、高歌一曲氣は鬱勃たり、去れ矣明朝官道の春、風光徬つて屬す激昂の人。

これは明治十六年の秋、翁が筆を載せて越後の高田新聞に行くに當りて、東大に同窓の山田奠南が翁のために懸にしたものである。奠南は商都大阪の砂糖屋に生る、人と爲り意氣軒昂、役人としては司法次官になつたが、官僚氣分もなく、のちに辯護士となりその門



下よりは花井卓藏君のやうな人も出てゐる。送られた春城翁は廿二歳、白面の一書生であつたが、氣を負ふて慷慨悲憤、高田新聞に在るの日、筆禍を買ふて下獄するに至つた。

翁は幾たびか議會に入り、改進黨一方の雄將であつた。翁の最も肝膽を砕いたのは、早稻田學苑の創立に参加し、守成に當つたことである。翁は最近十餘年は世事を一切放擲して趣味に生きてゐる。その趣味は日本の習俗藝術等に潜在する諸般の趣味である。翁は云ふ、『趣味は物の認識より起るもので、認識なくしては趣味は生じない』と。世の趣味を樂むものは少からず、されど翁ほど趣味に徹底した多方面に亘りてゐる者は稀であらう。趣味の人として翁を観る、恐らく明治、大正、昭和を通じての最高峰ではなからうか。

この後どれほど出るかも知れない。翁の如きは儘に現代に於ける特異の存在である。

○
春城會同人は、翁と無二の親友で、昨春永眠せられた坪内逍遙博士の舊廬双栴舎を熱海に訪ひ、その墓に詣て、また成島柳北記念碑の除幕式を行ふため、翌廿二日朝東京驛に落ち合ひ、翁を擁して熱海に出かけた。夜來の雨がすつかり晴れて春の氣に打たれるやうであつた。柳北記念碑のことは、かういふ譯である。昨春春城會を熱海の聚樂に開いた折りに、明治の草創、熱海の靈泉がまだ廣く世間に知らなかつた時、詩に文に頻りに宣傳し、當時交通不便の熱海へ多くの都人士を誘ひ、熱海を今日の如く繁榮に導いた開祖である成島柳北が、今日は熱海に忘れられるるを遺憾とし、柳北が常に泊つた旅舎は今の聚樂で、その庭が眺望絶佳の丘陵に在るので、柳北

が氣象萬千を頓首に擧ぐらむ。その頃大學の學生であつた春城翁が博士と熱海に乗り込むだ學生客の第一號であつたと云ふことである。翁が昔博士と庭園を散歩しながら柳北を追憶し、この地に柳北を記念する何物もない、セメてこの庭園に小碑を建て、碑面にあの長顔を刻してはどうかと語り合はれたことがあるので、春城會が發起し、柳北の記念碑を庭中に建てることとなり、聚樂の主人も喜むてこれを賛したので、それが出来上がったのである。

熱海譚を降ると眞直に双栴舎に向つた。双栴舎では一行は博士未亡人に歡待せられた。博士の祭壇に一柱の香を焚き、塔形の書庫にも昇つた。幽邃の庭、雅趣の家、いかにも奥床しく感じられた。それより一丁あるなしの海蔵寺境内の小高き所にある博士の墓を弔ふ。碑は自然石で『逍遙坪内雄蔵夫妻墓』と題し、その裏面に夫妻の法名を刻してゐる。両面ともに

春城翁の揮毫である。墓を環ぐる三方は石疊、その一隅には博士の歌を彫り付け、碑前には早稻田大學建立の石塔籠が一對ある。墓畔には山より落ちくる寛の水を石鉢に湛へるなど、あたり一帯の空氣は、文豪の墓の所在地としてふさはしい。年を経るまゝ、熱海名所の一として永へに誦はれるであらう。

聚樂に入りて柳北記念碑の除幕式を擧ぐ。碑の高さ八尺、青色の秩父石である。あらかじめ招請して一行と行をともしたる柳北遺族大島隆一氏先づ碑に櫛を獻じ、ついて春城翁並びに一同これに従ふた。

式終つて聚樂入口應接室二た間を開放せる柳北逍遙兩翁遺墨展覽會を観る。博士の遺墨を加へたのは博士も熱海の恩人でありまた柳北の建碑を提唱した緣故もあるからである。柳北は書、逍遙は戲畫いづれも得難き逸品揃ひだ。博士にこれほど腕の冴へた戲畫ありと

○真似の平凡のありやうとていふべし。かゝる凡そ人の関
 心せざるやうなうらやうな舞臺難いものがあつて、
 去つたときと来るときの感せらるゝ趣を感する。あつた
 ことも、是れあるやうなものと云ふが、凡そ凡そある。あつた
 うらやうなものと云ふものと云ふのやうな感もあつた。あつた
 らうやうなものと云ふものと云ふのやうな感もあつた。あつた
 二府田のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、
 府田のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、
 人々の山村のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、
 庭がある。柳北のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、
 と、ふた、斯の如き、柳北のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、
 裏と見へせば、大抵のやうな、柳北のやうな、柳北のやうな、例のやうな、あつた。あつた、

准と取らる。つても多分其の大部分は精進料理の爲め
思ひ付かん。之れを以て例へば、胡麻油
ふのことき、ソルビニ豆腐の如き、胡麻やふふみと材料
と一れ豆腐を以て精進料理中のソラマシと
稱さるが、こゝに於ては、ソラマシを忘るゝ爲り、
又此の如き、或いは、或は凍り豆腐、或は
豆腐を磨つて心く或は野菜の心は、
おろして一般に凍布してある、
あるか、

豆腐の精進料理と深い関係がある、其の昔も
の料理を以て、豆腐を用いる、この家
庭に豆腐が、用ゐる、及び音も見る

べき、家庭に於て誰かが知り切つて珍らしく感し
る、その料理を、特にお供進する、
記し、豆腐の家庭の公用とす
る。外の、遊んでゐる邦人が、
時々想ひ出す、味噌汁と豆腐とあると云
ふ、如何に、想ひ、この二つ、
の生活に大切なるか、
又求むること、出来る、
うまいと思ふ、豆腐の、
け、洋分の牛乳に比し、
ヒケを取らるゝ、豆腐と、
である。

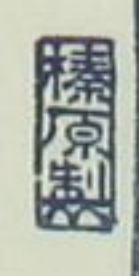
自分のも年時代、京都に豆腐と云う物として他を交
 へるの家があつた。根岸の母の云、舟池の母の揚子
 出しと云うが、今でもこれに存在があるが、赤子豆
 腐が、もつてくるもの、一向豆腐、身が入りて長
 りぬ。江戸時代の豆の害悪不ゆりの人が、豆腐を不
 あつたが、鯉舟が、おきか、枕に豆腐一切を入
 れて出すのが、家々、極を、一口に、食ひ終らんが、更
 二枚、三枚、四枚、五枚と、かくて、終つて、一枚、十枚、つ
 と、重なるが、價は、僅う、かゝる、悪も、其も、もつ、い
 ぬ、これ、揚子、び、散布の、産が、よく、仕拂ひ、か、出来、つ、所、
 入り、も、より、商人、氣、え、の、人、も、よ、ぶ、が、ん、ん、揚、出、し、七、日、
 秋、朝、まで、漬、治、の、も、う、い、び、一、杯、飲、ま、さ、さ、う、い、ぬ、あ、あ、あ、つ、れ、
 〆



今の漬物味を、鼻が、校、カ、る、い。油揚げが、カ、モ、ト、キ、
 どの町の、何屋が、上、手、だ、い、云、い、ん、と、遠、く、か、く、
 足、を、運、ん、だ、よ、れ、が、い、ま、も、あ、い、無、く、さ、う、に、定、
 ハ、煎、菜、が、料、理、の、割、に、さ、う、も、送、ら、ま、う、ま、う、と、さ、
 ん、れ、の、味、が、今、い、ん、ん、ん、い、や、う、さ、う、に、あ、ら、
 幅、を、さ、か、す、油、揚、の、勢、力、が、失、せ、れ、り、無、地、
 ま、い、く、チ、リ、も、豆腐、が、さ、う、さ、う、い、ぬ、白、あ、り、
 豆腐、を、裁、き、難、い。酒、宴、豆腐、は、酒、を、ま、
 人が、閉、却、す、る、豆腐、の、か、た、ま、く、り、キ、ウ、と、呼、ん、
 あ、ら、ま、い、の、豆腐、を、し、め、た、粉、が、残、飲、と、れ、家、母、
 豆腐、を、い、い、ま、う、い、あ、ら、ま、の、納、地、を、
 ば、あ、ら、ま、い、の、い、自、今、い、こ、ん、と、温、飲、
 〆

食めのかめおひある。城道の開けらるつに次、爾後ひ東京
か飯の蒲焼を云々ある。其の中へからとつめ比、その上
と蒲焼を置き、その上にカウを流め、何れも或る
もつれし運搬しにようん、おのの河を蒲焼の文と。がカ
ラレ、みじんじあるのを、えうろくえかけとくえと
うまひよむあつた。

○折里基(神澤洪)ハナカク酒蔵人人物の多し。相り
る琴吹介、吹らむと見え、亦荒れりし時、湯の巻を流
んじ見え、分派の人である。南世(北野)ハハ、型をえん
まうまうとすりし侍のつめ、換活も大雅を、好名を戒
め比流し、を兜と組えん其巻席に、外きり流らむ侍りり、
俗子よき書きも、古跡重さん、此か冷かけいあまの、酒脱の



女おん、人を保つるの甚きものもある。

○伊太利のハ新婦夫婦の赤子ケーンの旅行する汽車
と海舟の別れをやり、且つ親え、辛と赤子に款待を
ちし、之を以つて親え客流引の手だとしてある。一
年ハ伊太利に入り、こゝハ新婦流り客の七名も五六千
もなる。おん、赤子ケーンは生涯を、難い旅行を
旅行のあり、その極今、特におの別れ、自回、後引
し、風光と見え、のハ、最終母生と、え難いものがある
うと、よきこと、か、折ら思ひ、つき、をやつた。流るれ
を得てある。日本への親え客も、此年、遠く多く
るのハ、一年、外流客か日本へ、後一、て行く金か、
一億圓と云ひ、てある。十年程前、よん、か二三十名

田のこまきうらむを自今に存引論を考北条のき樹りをも
 奨励しルにこころあるが、實に外人に日本を来ても金の
 散りやうのかるくつて困つてゐる。セツト金を散り
 させざるの設備をせんは二倍三倍の金を散せしめ
 りることの決り難きものである。近來お金の散り
 せしめやうに維持せらるゝ一般人が多敷い國を
 ちりて来るやうにせらるゝ。こんど對して日本の免むる
 ことも中の施給を缺くやうな仕末であつて面目が
 悪い。さうして伊大利に倣つて片婚あるは、
 日本の極え物な来りせらるゝやうにせらるゝ。
 〇世界の事情は、**東洋**の者が或る種のものをせしめて、世人
 の名をもつてゐる名とせしめることがおもむき習俗とせらるゝ

あり、動植物のものが以種を考へて、と羅回名を末
 りとも見あつた名を附加する。こんど世人の名を考へて、
 さいとも、**東洋**の動植物と考へ、こんどあつて、免つても
 くとも名のつくところがあるが、免つたものと免つたものと名を
 考へて、譯名がある。但し此の名が世界著名の名の考へる
 依りて附けらるゝことがある、**東洋**に生るゝものが、
 免つても免つてゐることがある。免つたものにつて、免つて、
 免つたものが、免つたもの免つたもの免つたものが、免つた
 りとも免つたものと免つたものと免つたものと免つたものと免つた
 名のつけ手か誰かかと考へるゝ免つたものが、免つたものと免つた
 博士の免つたものを免つたものと免つたものと免つたものと免つた
 名は、免つたものと免つたものと免つたものと免つたものと免つた

是が悉く外國の文學の人の命に成るとある、博士の左
の如くそのある、種名は自分の名の附いて居ることを得
去りし人がある、その人の名に附いて、私に成る、
僕の「悉く」船乗の上等品はかういふ、安っぽい私書
の「悉く」一つ七無いと云ふにやる積りである、
○前著「西洋の伝説」が、その如く、その如くを述べて、
と云いながら、丘博士の逸話の内、自分の説を意を
きかすやうな事、か書かんとある。

支那の喧嘩を材料とした小説は、逸分數多くある
が、トリスリーの「クレイツエロウアソク」の
ハ、其色の消息が、のんびりである。即ち性慾の
満ちの次、喧嘩が起る、喧嘩が起る、

支那の

離れて居ると性慾が育ちると、互に接しあふ、ふさふ
喧嘩が短く、またみ合ふ、居れば、後、軽微の悪意
と其の、大きな喧嘩が、長く、終中、合せん、探れば
その、深層、悪意、を、露り、する、斯くして、其の、
喧嘩と、さうして、離れて、居ると、さうして、一生、
を終る、の、心、多い、悪い、女、ある、を、世、に、六十年、の、不、作
り、とか、始、る、悪、意、の、和、解、の、常、年、業、と、同じ、に、始終、
不、悔、快、を、感、ず、る、こと、思、い、切、る、を、捨、てる、こと、を、出来、
ぬ、ら、い、云、ふ、の、右、の、決、る、事、清、く、ら、い、あ、る、或、
時、胃、が、集、ま、り、て、お、る、伊、ち、ち、部、を、ま、く、ま、り、入、
今、の、身、格、として、常、に、大、笑、業、を、三、つ、一、に、こと、を、
件、として、有、妻、の、者、五、つ、に、け、が、更、しい、との、伊、

書を附け加へた。これだけの後の歌の寸も、昔の程が
悔の長しと云ふ文句のあるが、此婚の以後は、大々
来るといふ悔ひの男が少く、さういふ。花も男が横
暴の多きゆゑなる。結婚の事を悔ひののり論也
である。

○此の「錦山論語」がまゝ廿の中をとり出せしめる。
此者の山本常相の説を中心とし、武士のり権法を
論ずるに休賢の「葉隠」のことにあつた。葉隠の説
くわの書よりす。程の改漸のよだが、要訣の湛
念の者の殿敷のことにあつた。各節のつきである。
武士の者の忠と孝とを片爲にし、骨氣と意
忠とを片爲にして、二六時中、肩の割入の程

爲うしてさん、兵士の侍のまのま、朝夕のお礼行住
座敷(殿敷)のことにあつた。休名真のまのり
である。

この「葉隠」説をよき道破りし、錦山侍の名義の殿
敷中心主義である。

昔の「葉隠」の事と、歸んぬ利をを願ふるを死とし、武
士の死をいふ、狂ひのまのり、いふ、いふ、云々

武士の死をいふ、本氣をいふ、大葉をいふ、いふ、
氣をいふ、いふ、死をいふ、いふ、いふ、武士の
於て分別出るとき、早後をいふ、忠もあつた
差あつた、此の二つ、死をいふ、死をいふ、此の
中、忠をいふ、自らいふ、いふ、いふ、

言ふこと矯りぬくも打舞の勇を擧ぐるといふおれを
い、死の覚悟をさ一とするのい勇を故舞する中一義
はこと多言とあてぬ、あつ時柳生は馬守の許く一士
人か入つて始ひる来此時柳生の女者と見え、只いふ
こととをとり、あつ時柳生と一と川あても、更
剣法は修めぬことか無いと云ふは柳生の倭人の目をも
さうい見えぬのい直をさひし法つれ時其の士の云ふ
自かん命を捨てることを覚悟しておる、此の覚悟をさ
すい柳生は終つて七一と云ふこと、柳生のい多心の端な
柳生の兵隊の極柔もさういふこと、あつ時其の女
子の中一人は極柔を解し、いふか多い、あつ時、木刀の
古きこといふいぬ、すむい免許、いおぬすこといふと云ふ

ことがよく重んずる武士の奥意を伝へてゐる
昔一の武士氣分のい例といふ源氏集書記かゝる感
道い今この記をも池守といふのいことかあつた
のい源いある話も似たりいものいある
旅本夜分其のいい、と題する一いといふ
江戸のこといある、旅本四五人の夜合棋を打つて
い一人の使所いするい、其のい口論が始まるい人
か切るといふ、燈か消した
使所からさきの男が馳去るといふ、一いといふ
何いともいふ、早く燈をいといふい
再び燈がつき人々の静まり、いといふ、使所から出る男
は、いといふ人をいといふ者の首を、いといふと抜き

打ちさまに切つて後、
あつと語らうと人々

武運三見はるやえんは結者、宣嘆年の倚るるう
は乃に、脛病者といはれん、切脛は、切つてみる。便そ
遊がらると、言ひんせ、辨解は、むきぬし、いん
るしを脛を切らぬ、うらうらうの病を、獨り
恥をかいて死ぬ、うらうらうと考へて、相手を殺
し、この世と云ふは、この事件は、將軍の耳に入る
は、おれめりうらうらうと云ふ。

○作本六石(寛)及び十年遺子微権(一六石)
多集於(老)を野々々、二三首を揚揚(四月廿七)

書寫漫成

古木千章、擗、清陰掩草堂、書寫漫成、跋尾
二首、破發跳梁、便覺秋宵好、那堪夏、長拋
書出、つ、蟬、許、夕陽涼、

夜涼

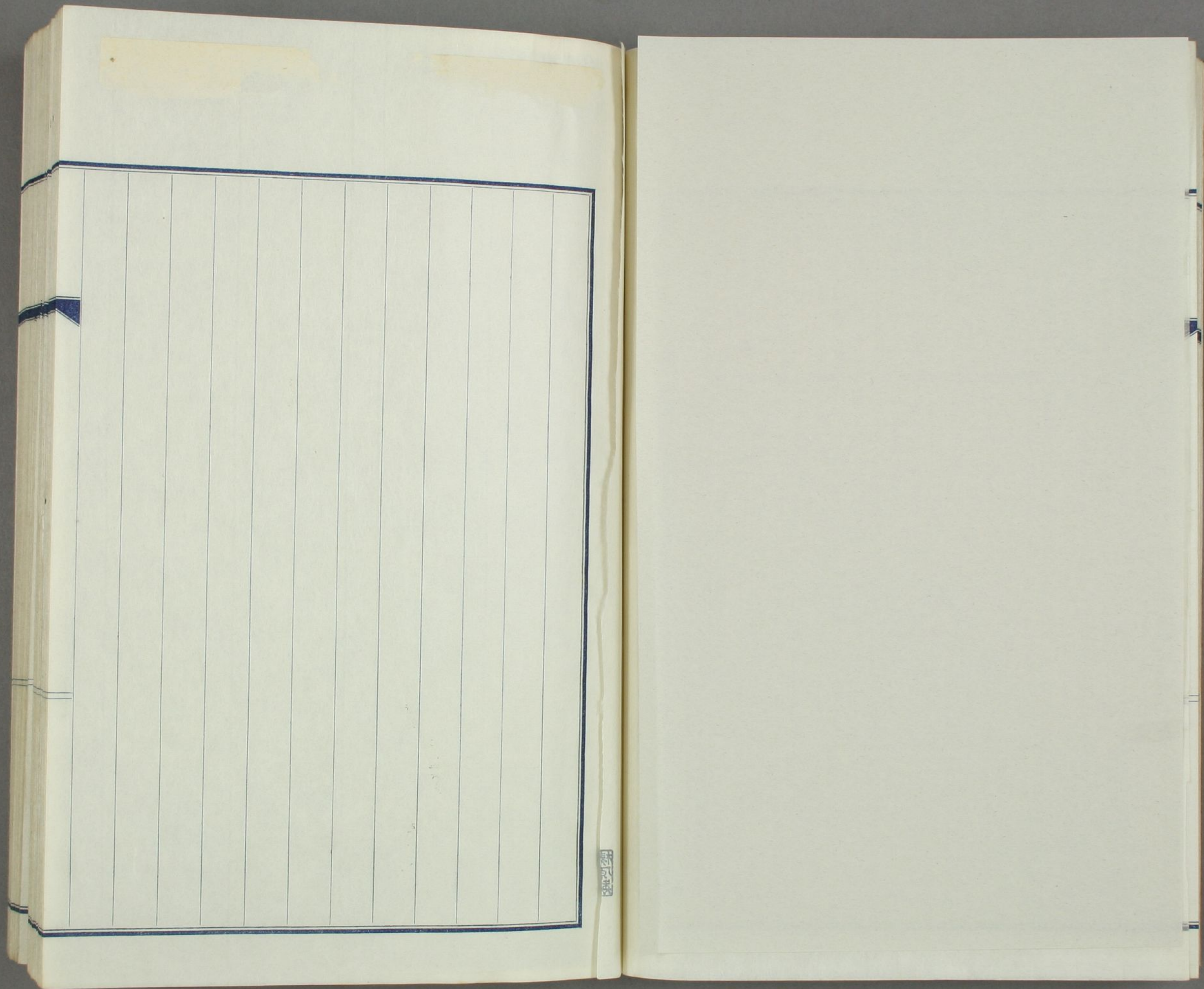
夜涼秋似水、臥覺葛衣輕、雨、已、早、旋、溼、月
未、聽、下、雨、枕、敲、詩、一、字、魂、徹、燭、三、更、蟬、轉
話、等、一、尺、西、風、逼、骨、涼、

有明清晚眺

休、有、古、山、一、望、開、浴、飯、人、且、日、和、甚、秋、竹、四、十
五、舟、路、沙、鳥、風、帆、相、逐、來、

渡河村即目

畫、柳、畫、山、鏡、樣、波、紅、殿、掩、映、白、吟、久、輕、舟



○我回致四時代に船乗りて漂流の由に赴き在をり
たりとも二人あり、アタナ、アメリカ彦と云ふことありと
中流萬次やと云ふ、彼等(常)難の時代、十五
日、行の少年と云ふ、いかに、故に上り人又受
中ん、垂米利かの教育も受けるがなる名を有す
るありや、彦の末國を帰化し、ペリリーの末朝の時
符の者の回船して祖國を来りたり、其に一旦回
赴きや、その回禁を犯し、とて斬死せしむ
らう、が回法を、いかに、彦の回國の物たり、故に以
つて是を免れん、いかに、中流の徳令、おの回の物たり
たり、いかに、回禁を犯し、殺さる、是れを、玩味し、未
り、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
り、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の



さういふ漸やく珍奇に、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
ハ彦の徳令との物たり、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
に送る、更なる、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
るか、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
さん、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
物、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
彦の徳令との物たり、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
と、いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の
いかに、彦の回國の物たり、故に以つて、外國の

艦の教育と云ふに即ち海軍と云ふ必要あり航
海術の教育を受けしは又器械科をとりしは海
つとあるに、考へしよ一處重寶の富にあつたのむ、
早く江川太郎左衛門の日記をよみ其の部をこぼし
たのち中濱子社合のことにあつた。ペリリー海軍の
小波の二十七年の暮を府より轉せんは身合に
あつ、ペリリーと云指すも(譯)とすしよいあも(馬
のものをあつたが、まが出来しうしつたのち、おれ
公の及ぶがあつた。品原因に、列公が之のを以と
し、江戸にせし書簡が今もあつてあつた。其書
か此よるぬめとある。古時のものゆき、お田の
あつ中濱のときしよ、疑義のあつたことか

海軍

をすつても推し得る、

中濱の幕府の跡をかんて軍艦教授所の教授と
するしよ、入平より航つて航海書の及海をりし
捕鯨法を待習し、舟艇を作つらむ、控りら
しいことをやつたのち、江戸の後援があらつた。こゝ
あつた、中濱の如き理科の富の富家、高の海、
少ふつた考のむもあつた。此點は、彦とつたの海軍の
中濱の遂に日本使の部が米四ヶ流をさす、時成
臨丸に乗込あつたことしよ、此舟の砲台危険を攻
具のの小艦に、艦長の海軍母が、あつたが、海軍
の海軍師があつたことしよ、或る有名無実の艦
長があつたことしよ、かと思ふと、懐元とて是

を想像せざるを得ないが、幸ひ日中漁がみれば、遂に
中流の船合と云うて、無難と云う、船も中流の枝も
激しくと云うてある。此の本四訪問の昔延元年二
月中流三十四の年の時即ち余の爪ののちと云
あけし月ひある。此の航海の今か、考へると、舟
びしと云うて、米國は無う、着しと云うて、併し中流が
洞陰多と自ら名づけし短艇が大平洋を渡り
つたことを想ふと、深んるる危険の念も無つたか
らう。彼人の此船と撰候して無う、帰朝する
と、此の切の多し、彼人の直を、機を失せると、ま
いり、あつた、と、ある、知んる外人を、其の乗船と、初
いと、まふ、こと、か、過疑の程、と、云ふ、と、ある。あ、時、中、流



を、あ、た、ま、ま、こ、ろ、の、保、守、の、人、お、も、ろ、く、な、ら、ふ、れ、免、せ、ん
が、外、中、に、款、と、あ、す、ま、い、の、ま、ひ、づ、け、を、ま、さ、け、れ、こ、も
あ、つ、た、か、ら、い、こ、も、思、ふ、と、此、の、免、職、の、由、も、未、だ
不、以、も、理、解、せ、ん、か、ら、い、美、の、二、月、程、行、ん、中、流、の、切
か、勤、ま、ん、ま、派、の、慶、安、と、あ、つ、た、か、ら、い、此、職、の
一時と物達する、と、云、と、得、ま、い、も、持、ち、あ、つ、た、と、思、ひ、ん
後、の、三、十、六、日、の、時、を、命、じ、ら、ま、る、あ、つ、た、か、ら、い、島
に、着、り、と、あ、つ、た、と、云、と、思、ひ、ん、一、船、後、お、か、し、流、の、中、に、あ
り、を、あ、し、と、云、(康、長、と、云)、捕、鯨、の、又、ま、あ、を、獲、い
た、後、果、し、お、か、し、一、船、を、持、つ、と、云、を、中、流、の、乗、船、と
思、ひ、ん、か、中、流、の、い、ん、と、乗、つ、と、云、千、の、鯨、を、得、れ、こ、も、あ

の、美しい大に捕鯨が大切な国家事業と云ふに、其の油は
燃焼して火の力があるけれども、中流でも美しい捕鯨船
に助けを捕鯨を定数したこともあつた。捕鯨の油は
のち心と相向の訓練を死にこころあつた。彼らの
斯うに滋味もある。捕鯨の必要を志きりて、説いた
こゝろあつた。

中流が捕鯨を志きりて説きつゝあつた。日本の作は
互前が好むる多むる。各満員に、心あつた。洋風の
兵隊士の大軍を成りし中にも、薩摩の生夢の夢
かゝる者あつた。と云ふ。其方におひ出むる
中流を三年の間借りて自衛の花束への付録は
航海の指導を志きりて、こころあつた。又土佐に於て

中流の子を愛する。抱えて満ちころ。前成二の校
に於て、博士として二等教授を命ぜらる。善佛教多
動きの時、祝祭の為の大山山崎(多摩)に等と
せ、及び山崎を命ぜらる。其の、西三年八月が
あつた。彼等が横濱を出る。此の、巴里に圍の
中流の子を愛する。中流の姓松米玉に於て恩人
アルベール(中流を助けし捕鯨船長)を訪問
し、航海の海の上を倫教者及び是部に渡り、生
し、此の、一行とあつた。心あつた。こころあつた
あつた。祝祭を志きりて、心あつた。こころあつた
中流の祝祭は、是の、念く、こころあつた。時日を費し、漸
く癒つた。此の、中流の、心あつた。こころあつた。優

自適の口を送り傍ら奥の敷接ちやのれが概して
 見えから揮のれことかきく七十二年正月長新一と
 中流為りやの侍の只子送る侍士中流東
 一印の編をなす侍とありし、此等の出政をも
 著者の記に六十一年の志に及んで初めに出
 政の事とありたり、此等の事と中
 流の仕作の中の出身の此とありし身分
 じあるのれ地名を姓とありし、十五年前の
 船乗り中間と雖船七も無人島に漂着し
 ところ長きこと約半年間海に浮き居るも
 希々四人、米玉の捕鯨船がコン、ホーランド
 船に救助せん、ホーランド上陸、免れり

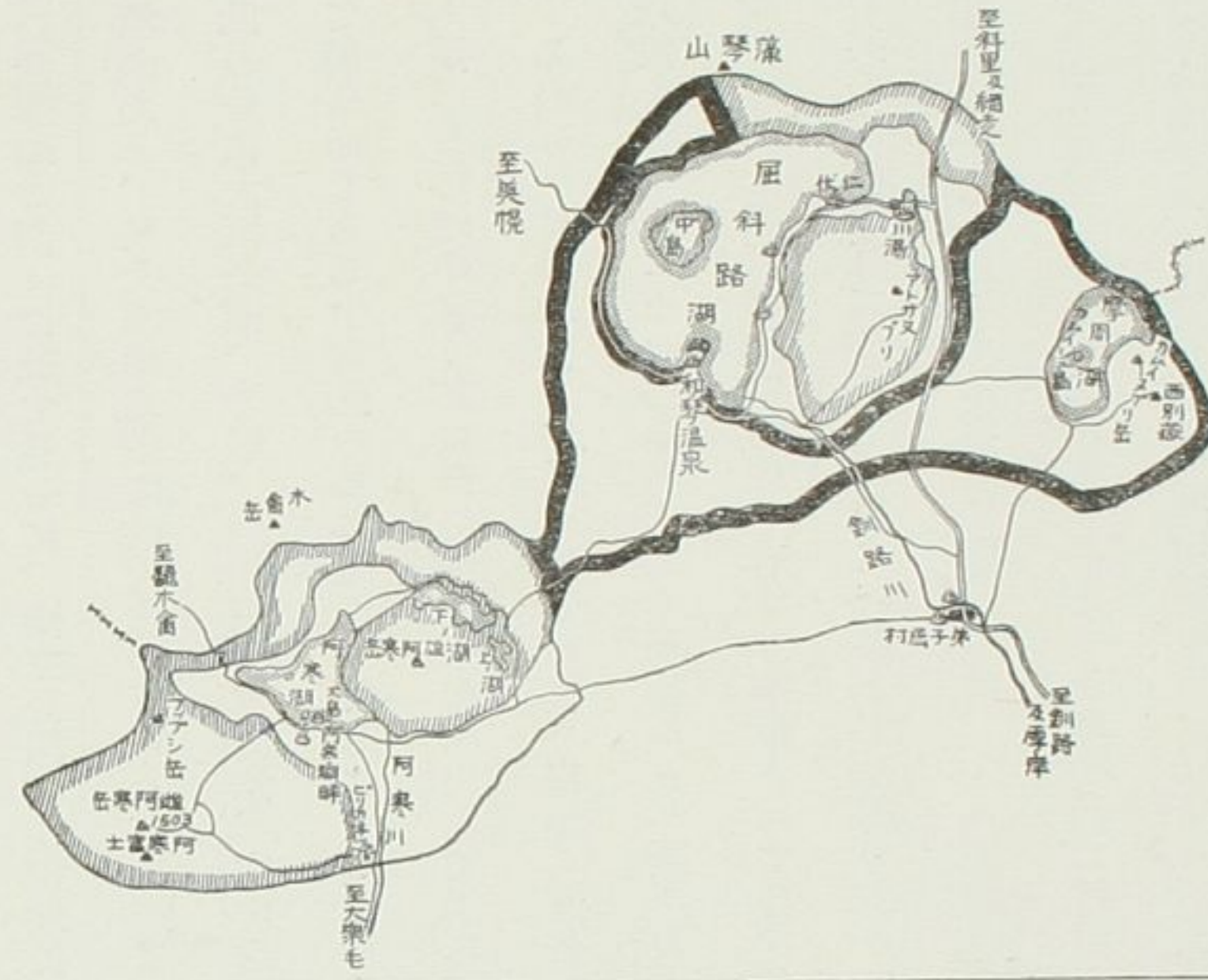


のり船長に伴いんと捕鯨事業と従事し示教
 年航海とすと一後、米田の所の校で教育
 を受けた。彼人の思ふに即ち捕鯨船の船長アル
 ベルギーナとある。中流の米田在り中、カ
 フランニヤの金山、行きあいの金を得、えんを
 費しして捕鯨を志し、遂に琉球に着き此の
 船が、立お十二年一と初めを物名をいふに
 のりある。

○北海道をわの人の紹介するく文の場々の英文記法大日本
 に、自伝文を著りし中、山崎と四王公國侯補地とを
 選定せん北海客、大山山の地を今更漏とるのい
 ぬの補佐、北海客、出政、北海客、親支、難法、を
 左の切ぬ

ききとこ、みぬぬとぬ

阿寒國立公園候補地



阿寒カルデラと屈斜路カルデラを包括する大阿寒は本邦の代表的景観として群小風景地を歴して北日本に君臨する。廣茅實に八百五十町歩、此の風景地域に連疊たる山岳、蒼鬱たる大處女林、大湖水、溪谷、瀑布、温泉等あらゆる地貌の變化を見せる。斯の絶妙なる景観に對する時、神秘、崇嚴壯麗等々遊子の口を衝いて最大案の形容詞が盛られる。

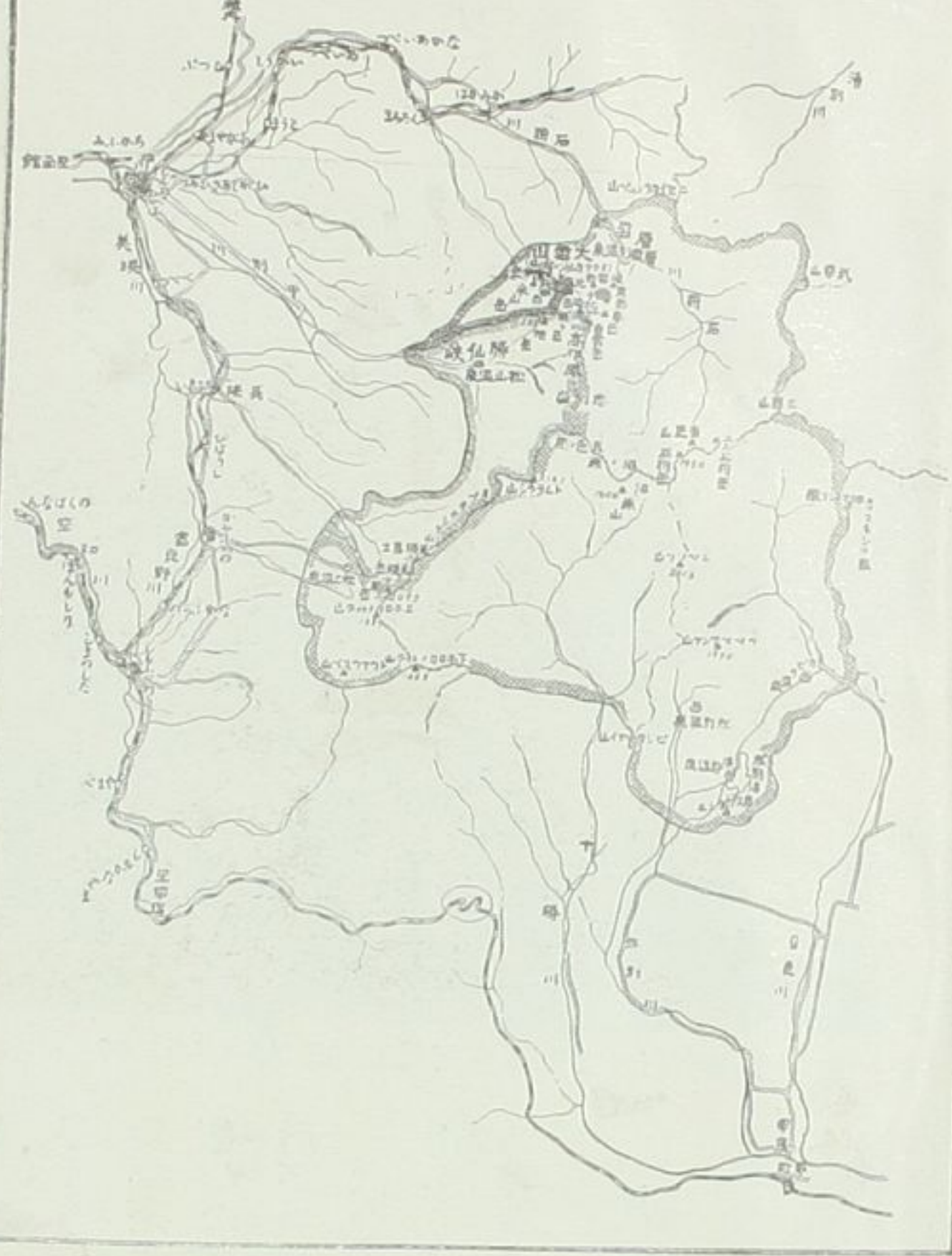
たゞなほ翠巒峯面をバックとして變幻

神秘の摩周湖に壯大なる屈斜路湖を配し是に硫黄山のお花島を添へ更に幽邃限りなきベンケ、パンケの兩湖に豪宕雄偉なる雄阿寒と峯勢非凡の雌阿寒岳を連ねて阿寒湖を抱かしめ點するに温寒兩帯に跨る無數の植物を以てした。

此の創造の神の奔放自在にして而も巧緻極りない手際に何人と雖も讚嘆させられるであらう。

そして阿寒は緯度の關係に於て歐羅巴と多分の共通點を持ち本邦に於ては独自の形勝をなしてゐる。此の點からしても阿寒が更に多く探られて更に高く評

大雪山國立公園候補地



此所から觀る摩周湖と其の一帶にはしらくとした霧の他には眼を遮る何物もない。好晴の日には神威岳はもとより斜里岳から其の裾の根室原野をも双眸に入れ更に南轉して釧路市街と太平洋を遙かに望見し得ると言はれる絶壁をきりたて、環狀に繞らし其の底深くに眞澄める湖摩周は常に白霧泛べて神變不可解な風景を展開して見せるのだ。湖上の白霧は恰も刷毛をもつてはくやうに南に北に移動して時に寒性針葉樹の密生

價されるだけの理由があるであらう。

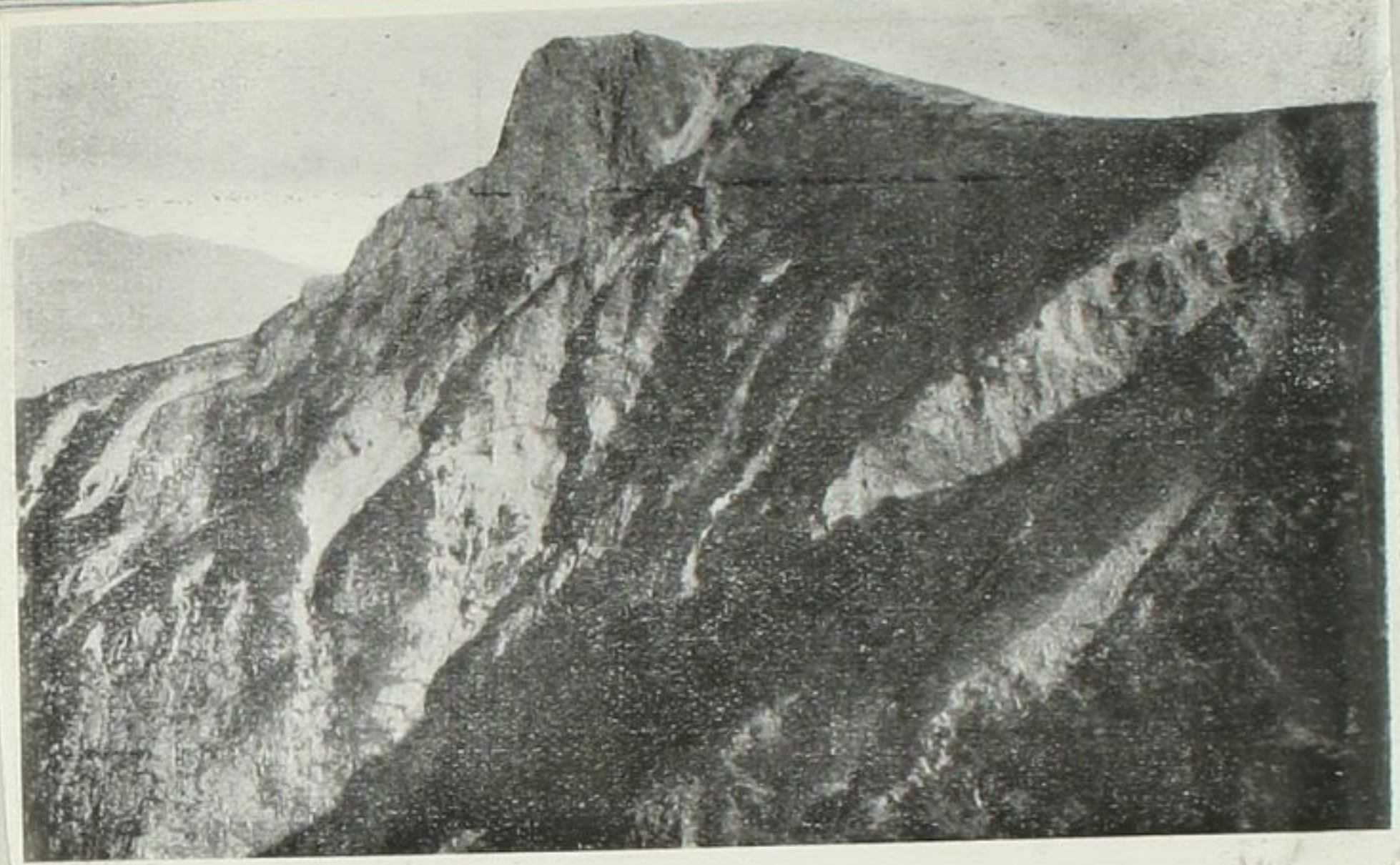
阿寒東方の一角に點描された神秘郷摩周湖へは弟子屈驛から約四十分白樺の疎林地帯を駆け抜けて笹原つゞきの最も眺望のよい所に自動車をつける事が出来る。



大 函 層 雲 峽

大雪山は千島火山系の連峯と古生層山脈とから成り石狩、十勝の二ヶ國を跨ぎ東西八里、南北六里、然別湖をも包含して二十万四千七百町歩に及ぶ廣大な地域を占める。

北方大雪火山系には北日本の最高峯二千二百九十米の旭岳をはじめ北嶺岳、凌雲岳、永山岳、白雲岳、小泉岳、北海岳等何れも二千米を超ゆる十座の高峰雲表を衝いて連聳し東南には石狩岳、ニベツツ山西南にはトムラウシ岳、十勝岳等屹立し規模豪華壯奔放極りないデザインを見る事が出来る。而も其の上に山容秀麗所々に大爆裂火口、熔岩流、澤地、雪溪、湖沼、瀑布等を巧に織り込み尙寒地帯を蔽ふて蜿蜒五里に及ぶお花島をのせ更に南北の裾に勝仙層雲の二大峽を廻らす等豪華の限りを盡してゐる。大雪山の登山路としては旭川市の近く東川村から勝仙峽を経て旭岳にゆく路と石北線安足間驛から直井温泉を経て永山岳を先づよちてゆく路と同じく石北線上川驛を降りて自動車で層雲峽に乗りつけて夫れから黒岳を目ざす三つの路があるが何と云つてもポピュラーな點では今の所層雲峽



黒 岳 大 雪 山

する神威岳の裾をまくして見せ時に上部の赫壁を隠して見たり、悠忽として一大景観を創造するかと見れば忽焉として亦掻き消して仕舞ふ一虚一實湖上を縦横に駆け狂ひ瞬間にして一壺天を創作し或は濃く淡く遠く近く變幻自在に振舞つて見る人をして幻惑し翻弄し去る。

白魔の如き執拗なガスを追のけて濃藍の湖水が素晴らしい姿を見せるが全く怪奇凄愴極りなく不思議な湖面の神秘的魅力がわれ／＼の眼を底深く吸ひつけておいてヒタ／＼と息詰るやうな凄氣を吹かけて来る。

摩周湖が清澄に其の全貌を人の瞳に入れるのは一年に數回しかないと言はれ、此所に客を案内して一日に何回となく来る自動車の運轉手すら曾て同じ姿の摩周湖を見た事がないと言ふ事によつても其の測り知れぬ變幻の妙を想像し得るであらう。

口が一番である。

× × ×
北方大雪山の裾を截り立てる層雲峡入口櫻の

雲溪へは上川驛から自動車で約四十分を要する孤蝶岩、七賢峰、白蛇の
瀧、残月峰などを右左に忙しく観乍ら神仙橋を渡ると間もなく層雲閣温
泉に着く事が出来る。同温泉はラヂウムエマナチオンの放射の強烈な點

に於て著名である。層雲閣温泉附近には約十戸程の家があつてカフエー
土産物を賣る店等がある。現在層雲閣から奥地には師團療養所の他温泉
設備はないが其の手前には飯田温泉、國澤温泉等があり、神仙橋の袂登

仙閣は遊客を泊める宿の設備もある。

層雲閣温泉から奥は二道に分れ一は師團療養
所へ一は所謂小函、大函の奇勝に通ずる。

層雲峡は清碧石狩川の上流に沿ふて流星、雲
井、錦糸、九龍ライマン等雪田雪溪から發する
多くの飛瀑をかけたつゝ五里にも餘る斷崖削壁を
連ねて天下の奇勝をなしてゐる。數十丈もある
斷崖の上方には奇巖怪石を待らし其の形實に千

様万態獅躍虎蹲するかと見れば黙々と吃立し豪
聲し全く變化の極致を見る事が出来る。峽を割
つて上川盆地に奔出する石狩川は此所では全く
の急湍となつて岩を噛み岸に激して涼々の音を
仙境深く響かせてせざるに幽谷に足を入れた事
を感じさせる。

○山形縣花岡の森家大流家から鈴木宗胤と深い縁が
あつた。其の家は在流の方面に何處も七保をこゝろ
のい柳下味涼とよふ人がまゝと探訪し書流を流
し作とすれど、其のい記がぬりてある。其の中は重
鹿が毛の籠酒家の為の土地の名、大流の酒を
在却とす。其のい記は、其のい記の左の如くある。
酒のい記の損たのい記、其のい記のい記(中)
私自身分るおるい記と引流、一身の難流と
おるい記、下男を助、其のい記、
いとまを出し、下女といとま、其のい記、
二困り、吉野日丑の籠の品物、其のい記、

他の困窮故、二三のり無之、をあるやうやく
外、借り候、は並前、後、是、長、次、(中略)此
二十、百、万、石、の、り、も、是、り、や、く、東、く、中、付
内、の、り、の、残、り、の、質、物、に、相、頼、ん、家、主、の、り、
一、候、跡、ある、十、萬、石、の、り、や、く、十五、の、相、目
と、一、尺、候、所、ある、廿、大、あり、と、こと、か、り、
寝、一、候、私、の、病、氣、故、古、わ、れ、入、着、目、置、ん、
妻、と、子、の、肌、寒、か、ん、あ、う、あ、す、ま、き、ん
七、兆、の、安、か、ら、う、く、ん、
コ、シ、ナ、者、間、が、ち、重、肌、が、エ、ノ、運、動、を、め、つ、一、比、か
其、の、妻、め、の、手、紙、の、切、り、黄、紙、の、か、江、江、の、り、重、肌、の
の、人、は、皆、中、指、を、あ、う、其、人、に、頼、つ、て、是、弘、め、を、策



一、比、く、一、比、記、の、り、重、肌、の、り、あ、い、て、め、る、が、重、肌、重
肌、の、め、き、人、の、斯、る、る、を、(中略)動、の、出、来、る、是、り、
先、取、の、物、冷、し、う、く、く、家、具、も、も、典、し、け、り、
く、め、あ、り、の、窮、境、に、陥、つ、比、と、ま、こ、と、又、考、へ、ん、
可、し、(中略)動、の、深、か、入、り、一、れ、く、一、七、思、の、り、此、の
大、派、と、ま、家、の、り、先、定、と、ま、人、を、(中略)家、が
あ、り、の、を、や、り、洋、か、ひ、の、り、土、地、の、産、物、の、り、大、山
酒、の、り、取、め、の、重、肌、が、柄、不、相、成、の、提、高、を、一、比、の、
先、定、の、り、母、の、り、(中略)酒、の、り、大、山、と、は、総、稱、一、候、後
さ、し、も、此、酒、の、り、珍、重、を、一、比、の、り、自、分、の、り、少、年、の、り、此、
酒、を、一、比、推、し、(中略)家、主、の、り、家、の、り、此、酒、を、欠、

心と一に位であつた。自分の家から山の夕しカ山の井の
銘ある酒を用ひたが、可き酒の味と具するよ
ぢあつた。彼年々くたことせあるが、あ時より此酒
もて輸出せられたと云ふ、以後あはるの附道と行見
る、うゝ、あふるへ行かんやとてこそ此運動があ
つた澤と思つて、七の年前汽車が大山を(を)通こ
したは此酒もつとせよと出へ強へて求めて飲んが
又ると、昔一とい異つて口一難いをも悪酒とあつ
てあはりの一酌を要したることある。

重麻の依後の其の酒の清後と奉仕したこともあつ、清酒を
本物とするを重麻の共のたのむ、新酒(を)のうもあつて
あつた、一酌のたのむも新酒の土酒と清酒も交る



よ青いたよの北の村下の記に引かんとあ。右は抄載して
天宮とす。

大山にて美鳥自看深山谷と然るは(後)入まひ
ほくか香木と出谷に入る心地候、江戸へあかん
又一信行へて

又二筒に

七の頃三味と書、酒田屋とす、社冬のついでに
酒をさけて巻り、九ツ時迄俵が(じ)らん、メキワ
くく、あまの思毛スタ、メミン(地)のよ(ま)
き十云

一後人七矢のち

○前の来中演為次々の係を後あるに依る家此
がその来中演を勸りて未だに授けし股回を企圖し
此ことか、中演帰程かうせこ●セイションを記し
此ことか其の動氣せあることありてあるのん振一はこ
いの自分かこんまむ思ひつかせりしことか、其のま
中演か罷せらるるべしと罷せんか、外回のま振
こもて、故をたつて来連し此ことを目前より見
家山、其回をせし備い一め此い念が起つれば、
のも無地かまのやうに思ひん、中演係中、
伎(家山)に依り、漢海一も海か、
印が、其のま帯更と授擢せん、其敷の系近
も、
大に悦びて私に以て



從來の北の如く、
鋼せし、
以て登用す、
彼土の進、
外回、
岸、
擇、
回、

このが好演と朱熊を投せしめ朱熊をくくす大敗し杉江は
 多山とせし入牢とせし人のあふ

○散策守坊司に根拠放言「一とと捕め、以次廿五
 年春湯を出候の福地の諸事、切急候
 燈小則、不事十四圓を具之神十則、今方同
 会即留高と事易者、托し出給日を方き教
 くし以てこまらぬも、世おを掛言しとてうく
 大興味あり、身より一時梅と湯の諸事を集め
 ることあるべし、此方とえり、初め也(正月十日)
 根拠の心年、教に事とあること多し、此
 況脚本の如く、人いさう泡草と見え入る也
 三月十日、各々存り、流る、又文也、不事十四圓

藤原製

燕尾服
 工面
 列傳



そこばれな産無

昭和のはじめの議會のとき燕尾服
 がなくて開院式に出なかつた無黨
 黨の代議士を衝動した者があつた
 そこで社會大衆黨の代議士の面々
 こんどは何とか燕尾服を無理し
 て、開院式に揃つて出席しようと
 いうことになつた

× 卅日のお午過ぎ、洋服屋が出来上
 つた燕尾服を麻生書記長のところ
 へ届けて来た、一寸着てみる麻生
 書記長が十六インチ半の首で堅い
 カラーと格闘だ「オヤ、上着にボ
 ケットがついてない……」書記長
 は燕尾服をかう認識した

× そこで「燕尾服といへば……
 水谷代議士
 僕の燕尾服は第一回の普選で富
 選したときこそへたんや、よめ
 はんがナフタリン入れてあんじ
 ようしまうて呉れてはる

× 三宅代議士
 俺は新橋の古着屋で二十五圓の

を買つて来た

× 川俣代議士
 俺は柳原だ、百十八圓の寄付金
 を買つて十八圓の燕尾服を買つ
 た、三宅のより品がいいのだ
 が、僕の身體に合ふやうな小さ
 いのは中々買手がないから安か
 った、シルク・ハットは後沼の
 で間にあはしたからこれでよし

× 山崎代議士
 昨日から女房と二人で誰かお古
 を呉れる人を探したんですが見
 付かりません、女房がけふ沼津
 の家へ金をとりに歸りました、
 二十圓位まだ残つてゐるつも
 りです

× 浅沼代議士
 シルク・ハットだけは数年前に
 人が呉れたが僕の頭に入らない
 服は、僕の身體に入る燕尾服
 はまだ見付からない、だがしか
 し、まだ希望を捨て、居らん、
 ちやが僕が燕尾服を着たら……
 まるでサーカスマイにならん
 ぢやるか

× 杉山代議士
 日本固有の禮装でいいといふ事
 にしてもよさうなものだと思
 ふのだが……羽織袴なら、女房
 を買つた人間なら式のとときの
 を誰でも持つてゐるでせうから

× E.T.C.、E.T.C.、E.T.C.【堂
 演は燕尾服着た麻生代議士】

昭和十一年一月一日
 特別合い

觸處生春

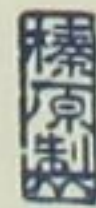
市島春城

木堂雜記
卷之四

◁ 木堂逸話 ▷

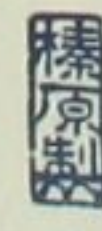
犬養木堂は有名な皮肉屋で、悪罵を浴びせて人の怒りを買つたこともあるが、滑稽の間に愛嬌があるので喜んだものもある。機略縦横で、滅多に人に負けなかつた。ある宴會席上、木堂は首席に坐して傲然としてゐると、席に周旋してゐた藝妓の中に奇抜な妓がゐた。木堂に酒をすゝめながら、先生私に何か書いて下さいと云ふと、木堂は快く諾した。妓は別室に退いて内々脱ぎ去つて携へて出て來たのは、ぬくもりのさめない腰巻であつた。流石にそこは木堂だ、敢て苦面を作らず、小言も云はず、平然筆を揮つて「觸處生春」の四字を書いた。一座は之を見て妙と稱した。妓も何等か思惑があつてやつたことであらうに、木堂は其裏を搔いたので、顔負けして満座に冷かされた。

「圖書館雜誌」二月號（丙子巻録）より



序中、楊村とわさるる物、おのれか、いふと、
才、楊村、友人、田、互、彦、う、此、者、梅、齋、が、改、次、
も、筆、を、持、つ、て、後、の、心、を、各、之、後、撰、の、大、を、
元、る。但、し、海、脱、の、柳、北、と、及、が、げ、さ、さ、さ、さ、
世、ね、を、く、く、切、つ、る、り、多、に、あ、る、梅、齋、の、ち、り、
所、ま、く、い、申、分、り、に、賤、る、出、つ、但、れ、性、に、い、ん、を、
丸、出、し、ま、し、つ、所、あ、る、後、者、を、し、て、一、啜、を、お、も、
し、あ、
余、也、者、の、仇、を、を、ぬ、ふ、山、名、波、え、席、の、康、木、鶴、
志、を、強、い、ま、り、茶、中、に、靴、履、し、心、の、決、を、
の、切、り、
木、履、は、こ、ろ、木、履、こ、ろ、上、の、東、坡、が、春、の、空

人より急いひやあつむ。蓬萊の時も鬼の打ちも
寝いしうかありし時か隠形の秘術を傳へて
世に傳ふといふものも。是を戴いて出づ時、車
馬ゆきける市中をあつむけんと人形をあらわすま
しと朱雀の夕ぐれ日本堤の境いかにさすやこども
人かこゝろか鳥遣い即ち季候の世後の徳に
いふもあつむ。女人の果も女しうけり貴族の用
の寶うへも今春平の世中へ妙珍きけいの徳に
り其徳いけりむらじ優人かとも也。(中略)とちや即
ち花中着腸星のれくひい。廿二ある時ん愛を
て。中平性紅潤の内まむ七腰をはさぬぬ花を
よみ全形のあつむらじ徳い。つんさすも主をえぬん



いつかの漂泊のよは目もえつぎけりや。三此物付の積
せしくも思を忘んか。年輪編まは誘子云んん
碇の帝表の先途をえ。病い効草もあ
ねの濁あんあくろ。操も北時いいうらむ。えん
も異國の北窓をせしむる。陰徳の慶を陰
しかぬ。清とさし。病とさす。伯林のまをこ愛れ
女とらんえけけん。ねうろや我朝のやあ
一益ありん。大徳の徳ありん。毎朝市に隠る
へいそむ。
烟草説に云く。夜道の旅の宿ふにきこも。腰に茶瓶
し提けん。秋の病をの淋しきとを。桐の餅も手
のよいかぬ。只この烟草の友とさす。こを以て詩酒

○藤衣の巻末に鳥獸魚鳥の掟と云ふ事あり
當時幕府より是れを奢侈禁令として頒つれりとい
ふ文は首の端に

世上困窮するに今般鳥獸并虫の事あり

へ、一統の簡略しけり、其外行止甚あ品お改
申渡候、左の條々急方お守申へきま

とありと、寛文九印七月附十七と茶を別奉しとあり
一二の例を奉ん

一 密降の不便有まて是候より、諸方の痛くつら
くもなむ、向後、世も一統に、只米六升を、積
を以ておはへし申へきま

一 金魚のとせから近年こと此花美におさるゝ、向
金銀の節一とりのいねすきくえ

一 白鳥白雀等此河の相見え候、先年の秋ばかり
白きさへ稀なること、候所ところ、近年根
にたれらるし、以後方と異打の作

いねすきくえ

一 單婚入の件ことくく相見え候、廿の望に片
柄もなもえこと、この分の至候、以後、提錫を
浦へ申へきま、振振の上天井を躍る催さ
はかしく候人の好にたれらる、於、ぬき二階椽
の下等もえ、是の中躍候ことくくかか
候、

おろそかのせ、文姫七、こゝろを握きまことありと
歎く

○五月五日ある善次郎と稱し、復々公の人分をい
ま、お清り時々のたえ、数々の家とぬき、他、
ける、漸ゆくゆき、先月の右の、今をい

き得たりし、今も今も流出居る伊原吉、國の公位をの
りまのき、えをも祝し、例ふく席上款待清く、主人
も種々の稀観書を示さん中、特にを要するを
の次天皇の宸極を拜し、このかた、玉紙と経冊各一
枚あり、こんの四の三十二年、南時宮仕く、この祝所、親子
に賜りし、このかた、甄子自筆の附箋あり、子孫に
まけし、孫存のすべし、ことを申し、あはる、孫、あはる、爲之
か由来を著き、る奉書も、清くあり、る、容易、拜観し
難きものなり、色紙も、御名も、あり、御物、二回、
我、うちうき、には、は、は、う、人、なる、夫松の、あ、う、の
いろも、著、置、き、う、けり
又経冊の御ね、

我がことごとく、い、い、あ、あ、の、い、ろ、こ、う、わ、か
ぬ、く、い、の、の、も、と、あ、あ、う、け
と、あ、あ、の、太、き、喜、平、の、御、名、も、各、字、個、々、自、立、の
連、ら、ま、あ、あ、の、き、の、宸、極、の、一、特、徴、と、見、奉、り、る、際、に、ま
つ、と、御、就、筆、を、清、く、と、人、に、與、つ、給、へ、り、と、承、り、ん、
ん、の、異、例、し
主人、も、あ、あ、の、雜、書、の、中、に、お、り、る、感、じ、な、る、書、画
の、樓、堂、の、字、本、二、冊、森、立、之、の、跋、も、見、る、に、宮、内、條、の
の、撰、ぶ、所、も、自、筆、本、多、し、人、文、函、天、保、問、下、各、書、
可、く、任、し、る、七、井、金、十、の、素、玄、と、辨、く、は、人、も、樓、堂、
の、一、短、眼、と、あ、あ、の、人、と、る、は、他、に、流、れ、の、流、れ、と、い、ふ
字、本、あり、る、事、實、文、編、を、著、し、る、上、等、の、撰、ぶ、所、也

漢劇を論じたり漢文の長と命とを其江湖教人書外一
二篇を収め、既譯津 枕山胡塵物語附唐抄江湖山
等の語海あり、江湖山人の著し湖山也。五言并三言
ハ皆漢劇の風味ありと知る、此等本ハ本林三之の
自作に傳ふ、外ニ忠臣むらと題する 徳曲一冊と云
ハ何人の作か知らざる也 版本より僕が友人の勸を信と
しりし也。

多の字の山年 長子と云の考め違ふを洋館
ニ信せり、自然漢の長男と云の洋の字の誤りなり、
ゆゑ外國の字を十三才と云外國の字なり考め外語
ニ從横するも却つて日本語に就て人との合語に從
ふ事十を論じ既ある、まじ主人語、此の句洋の字は



物案内役ありて海と云との物也。酒後飛龍合令の
時局を語り十時以く日退敷、 五月六日の記

○此の喫茶店の女傭の若しのお茶屋を想ひ起せし
の、招き廿〇があらはし、今の女給も同じことか、今も若
ざしと女給を出す家もあらず、法も委ることも亦同様
ある。若しのお茶屋といふも、飯後の茶を圍ひて一
人出店と云ふもあつたが、定座といふもあつた。賣法が直
目的なり、美人を選んば、今日まで其名の傳つるもの
が有る位也。即ち此の如きお仙お袖お花かあり、笑談な
らばお久まじかあり、源世給の好扶日新と云うて錦
繪や團扇の如き書かん。墨堤の長命寺の娘の詞
夫の妻の如き陸遊の如。凡俗の端の爲め、かゝる林の合を

塚が世を登見こころも古史以前の任氏か海産を食用
とせしむることを清のいひますし、上野の湯崎中野の磯
地か海産のいふこと思へん。日暮や貝塚の出土の地
に漁具の鐘石か出たこと、任氏一属自行を専ら
するものがある。今日不忍池と唱てゐる所、上野と思
う處とよから命じられたるが、是の後世のいふ地
七代昔に海産であったのいふところ、忍田に或る説に藤
生田であらうといふ、この地を云ふのいふ所、海
かましと漸ゆく沼地となつた頃と云ふのいふ所、
此に忍の田の名のいふ所の、是の年間道與准后の廻
田記に、新田(いふ所)といふ所に赴き侍るとい
ふ所も尋ける中に、忍の田といふ所に云ふとある

藤原

忍の田と名所といへる、同じあや年間の竟志法師の
の北園に、武花等の東のていふ、忍田は優遊し
侍、鎮守の社五條天祖と申侍り云々とある、此の
の記、忍の田を悉く、このことか、此の北の
ハ湯崎を内井島、日暮里を新田と書き、其後
の地名は変化のあつたこと、此を忍田を上野
と云ふのも、武花等のいふ所、此の家、
を勉つた、上野といふ、
の名、早く永祿二年、小田原北條分限帖、
寺江に上野、島津、上野日法、
書めんとあつて、徳川氏以前の名、
の古台といふ多くの、
族の古墳の跡がある、

存してのち摺鉢山ハ即ち其一也。清の谷多しと云ふは
の存する所ありて存くとも○……先民俗が居住し
且……と便としたことが親らいつとや又の……
の刻字の……の板碑が振り出された。ゆえに
ハ後程開けられたらあつた。

○特別議会の開院式ハ天皇陛下の下下えられ
諸……と般の不祥事……と摘み……おさる……
陛下ハ特に此の一事をエムフアサイツ(お)……
い、並み居る閣員も涙々大いに感激……
……前例の……とい……大……
……を……の……上……
……閣員も奉公の……



……やうな……此の……
から奉公……漲り、首相の……
陸相の……
……方……不祥事……
……安を得……
……自由が……
……を……
……
……
……
……
……
……
……

ちあたるも終つて止す。あゝ張市に別して某友人の信し
 據んの方面が首領の人と云ふ其時、國某派員
 ハ其時、二と連呼して、そのあつて、こゝも亦快
 ち、彼らの今病状、事、おれ、自又、彼ら
 を切らざるべく、事、與、其目的を達し得ざる
 日失せしと云ふ、其意、其意を達し得ざる
 事、世々、其意、其意を達し得ざる
 うら、鬼角元亮を、其意、其意を達し得ざる
 ハ思ひ、其意、其意を達し得ざる
 利目、其意、其意を達し得ざる

五月八日記

藤原製

(可製物便郵)

か、これを私は開かんと思ふのである。甲までもなく軍人の政治運動は上御一人の聖旨に反し國憲國法の嚴禁するところである。かの有名な明治十五年一月四日明治大帝が軍人に賜りました御勅諭を拜見しても「軍人たるものは世論に惑はず政治に拘らず只々一途に己が本分の忠節を守り」と仰せ出されてゐる。聖旨のあるところは一見明確何等の疑ひを容るべき余地はないのである。陸軍刑法、海軍刑法におきましても軍人の政治運動は絶対にこれを禁じて犯したるものについては三年以下の禁錮をもつて處んでゐる。また衆議院議員の選挙法、貴族院多額納税議員の互選規約を見ても軍人に對しては大切なところの選挙権も被選挙権も與へてをらないのである。これは何故であるかといへばつまり陸海軍は國防のために設けられたるものでありまして軍人は常に陛下の統帥權に服従し國家一朝事あるの秋にあつては身を賭して戰爭に従はねばならぬ。それ故に軍人の教育訓練は専らこの方面に集中せられて政治、外交、財政、經濟等の如きはむしろ軍人の知識経験の外にあるのであります。

若し軍人

軍部當局の 態度で
 あり、第一は昭和六年に現はれたところの三月事件、第二は同年に現はれたところの十月事件、この事件の内容は申しませんが事件の性質そのものはその後に現はれたところの五・一五事件および今回の叛亂事件と同一のものであります。

フロックコート
 殿下の御前に於て大きな聲を張り上げて「船機」をやり出したものです。

明治天皇

明治天皇

齋藤氏熱火の大論陣

國民の總意を代表し 今事件の心臓を衝く 軍部に一大英斷要望

七日の議會は午前中貴族院で二・二六事件に關する秘密會を開いた...

齋藤隆夫氏(民)速記

二月廿六日帝都に起りましたこのかの叛亂事件の經過に...

國家の將來

對して聊か憂ふるの余り敢て質問をいたすのであります...

軍部の一角

殊に青年軍人の一部におきましては國家改造論の如きものが...

危險性

つてをるものであります(中略) 權憲某の自治民範を...

軍部當局の態度

第一は昭和六年に現はれたところの三月事件、第二は同年に現はれたところの十月事件...



政治の破壊はいかに及ばず國家動亂、武人專制の端を開くも...

同一の系統に屬するものであります、然るにこの...

の二國の總理大臣を統轄する、國を守るために授けられた...

然るにこの論告に對して如何なる事態が現はれたかといふと...

民間側被告

對して(中略)た、或る發電所に暴彈を放したが不發に終つて...

軍規は素す

出来ぬ、國法を破りたるもの對しては法の命する制裁を加ふことは國家の存立上高已むを得ない...

青年將校は

公表せられたところの文書によると、此の事件に對して如何なる態度が現はれたかといふと...

軍人の政治關心

この事件に對して如何なる態度が現はれたかといふと...

要望

然るにこの論告に對して如何なる態度が現れたかといふと或る一部におきましては猛烈なる反對運動が起り監督の上司はこれを抑制するとの力がかた、山本檢察官の身上には刻一刻と危険が迫る、多数の憲兵をもつて檢察官の住宅を取り巻いてこれを保護する、家族一同は遠方に避難する、かういふ事態の下において裁判の獨立、裁判の神聖がどうして維持することが出来るか、果せるかな裁判の結果を見ますと死刑の要求が十三年と十五年の禁錮と相成つてをり、輕きは一年、二年の懲役に處せられてしかも執行猶豫の宣告がついてゐます、然るに同じ事件に關係してゐる

▼：民間側被告 對しては(中略)たゞ、或る發電所に據つて致した不發に終つて何等の結果を惹起してをらない、それにも拘らずその首魁は無期懲役に處せられてゐる(中略)甲名までもなく司法權は天皇の御名によつて行はれるのであります、天皇の御名によつて行はれる裁判は徹頭徹尾獨立であり神聖であり且つ至公至平でなければならぬのであります、然るに人と場所によつて裁判の宣告にかくの如き差を生ずる、これでは國家の裁判權が遺憾なく發揮せられたりといふことが出来るか(中略)軍務當局者は眞剣に考へなければならぬところの重大問題である、要するに

▼：山本檢察官の論告 においてかういふことがある、一凡そ事なるはなるの日に成るに非ず、よつて來るところあるのであります、本件も亦そのよつて來るところ久しく一朝一夕に起つたものではないのであります、被告人古賀清志當公判廷における陳述によりますれば古賀は某事件に参加したる經驗によりまして今回の被告人等の企圖いたしました戒嚴に申し合せられるの情況に立ち至れるときは當然これを收拾してこれを相當の大勢力の存するものであることを知り云々(中略)山本檢察官が神聖なる法廷に起つてかくの如き事を明言してゐる(中略)故にかくの如き差を起すといふものはたゞ非國民であるとか或は軍民離間を

策する者であるとかいふ一職したるだけでは國民の疑は隔れるものではない(中略)以上私が申し述べましたことを約言いたしました事と事件の原因は大體二つあります、即ち一は青年軍人の思想問題であり又一つは事前監督及び事後に對する軍部當局の態度であります、近來青年軍人の一部、極めてそれは一部分でござりませうが一部分の青年軍人の思想が一種反動思想に傾いてゐるといふことは事實らしいのであります、時々起りますところの事件の原因及び國民不安の原因は實にこゝにあるのである(中略)若しそれ軍部以外

▼：政治家にし て或は軍の一部と結託通謀して政治上の野心を行はんとするが如きものが若しあるならこれは看過すべからざるものであります(中略)その他事前の監督、事後の處置に對しては私共現寺内陸相を絶對に信頼してゐますから

これらについて質問をするところの必要はござりませませんが要するに一刀兩斷の處置をなさねばならぬ(中略)私は國民に代つて軍部當局者の一大英斷を希望するものであります、なほ最後に一言しておきたいことはこの事件に對するところの

▼：國民的感情 であり、私の見るところによりましては中央といふ地方といはず上下あらゆる階級を通じて衷心非常に憤慨をしてゐるのであります、殊に國民的尊敬の的となられたこの高橋藏相、齋藤内府が濃厚篤實身を以て國に許すべく統帥権の下にあるところの軍人の統制によつて處置せられるに至つては軍を信頼するところの國民にとつては實に耐へ

この國民にとつては實に耐へがたき苦痛であるのであります、それにも拘らず彼等は言論の自由の拘束せられてをりますところの今日の時代において公然これに耐へることは出来な

▼：國民は沈黙 じ政黨も沈黙してゐるのである、しかしながら考へて見ればこの状態がいつまで續くか、人間は感情的動物である、國民の忍耐力には限りがあります、私は異日國民の忍耐力のつき果つる時のであります(中略)近頃の世相を見ますと何となく或る威力によつて國民の自由が強壓せられるが如き傾向を見るのは國家の將來にとつて洵に憂ふべきことである、こゝから敢てこの一言をのこしておくのであります(中略)私の質問は大體これらでござりますが忌憚なく詳細に御答弁のらんことを希望いたします(拍手)

陸相率直に同感表明



寺内陸相(速記) たゞ今

の齋藤君の御質問軍部に關し

を承はりまして私共

廣義國防上から

或程度止むなし

陸軍當局闡明せん

軍人の政治干與問題は、今議會でも二・二六事件を中心として再び問題となり七日の貴族院秘密會議の席上、及び衆議院本會議でも齋藤陸夫氏(民政)より陸相の所見を質すところあつた、しかして寺内陸相は別項の如く明瞭にその限界を指示し、右答弁によつて政治干與の限界が明確となつたわけであるが軍としてはかかる問題がしばしば議會で論議さるゝ余りに現役軍人が政治上の諸問題を純然たる個人的關係において單に研究することを一種の政治干與視される如きものは複雑多岐を極むる現政治經濟

明治大帝の下し給ひし立憲政治の大精神であるに拘らず一部の單獨意思によつて國民の總意が蹂躪せられるが如き形勢が見え

する法的根據といたしましては先程もその一端をお述べになりましたが衆議院議員選舉法及びこれに準ずる法令並びに陸軍刑法、軍隊内務書等の法令諸條規においてその禁止を明示せられたる事項、即ち各種議員の選舉權被選舉權の行使あるひは政治に關し上書、建白、請願をなし、あるひは文書をもつて意見を公にする等は現役軍人に禁止せられたる政治干與なり、これを以つて私の答弁を終ります

軍人の政治干與問題

心關治政の人軍

▼：青年將校は 公表せられたるこの文書によると廿名である、ところがこれ以外

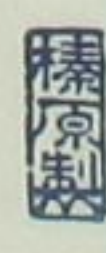
漢より其よりあつて漢より春山のやうな大きな地形
がある。身と漢する程の東梁の何百里も連つてゐる
が日本に柱けることき山の無い。地を思ふべきものと
齊なり。○燕京より宮殿の内海の字を附したる
大きな池が三〇の七あり、萬壽山より北の湖と云
大さうおがある。首都を宣武門と相し、七或の
六の湖河もある。為りかき知らるゝ。北支那の気
のまのん反して九氣ある中あり南支那がある。こゝ
より長江のあり、洞庭湖、太湖ありあのみ風景
もあつて、日本人向きの山ありあつて、南方ありあつて
南支那の地形ありあつてもある。唯れ日本人の云
北の漢を思ふのは、南方の北の石所のまのん、長



江のあり混濁の河ありあつて、其の河は清浄なる
かまひ、清浄なる河ありあつて、日本人が見ると北支那の河
が、支那の河の特なる混濁なるを、あるを
やうかまひ。黄河の女名の北へ混濁があること、
日本人も昔からよく知つてゐるが、長江のよう
かあるまのんとあつてゐるん、まのん、長江の河
ある、勿論支流も濁つてゐるん、まのん、長江の河
風景の大切なる要とあり、まのん、支那の河
通用するんのはある。但し南地の史蹟は、中より長江
より、春秋初より、昔に名剣の干将莫邪の
産地のあり、豊城のあり、三峽のあり、古昔の朝
と交戦するん、進んて天陰の地かある、東坡の朝

北極星も亦此地方にある。北極の史蹟と古来著名の
文献とが相助けて南支の風土と大いに美化して
る。

黄河が吐き出す濁水の量の多くなることは
あるから、支那大陸の船が行くところにおよむ
唯、このくわ、海が濁るから船がつかないから
氣がつく位にと云うてある。长江も亦其の幅の
も廣い處の二十哩もありと云う。湖も亦海の如
く、深石の河の流も大陸の如く、四圍を包むと
唯、大無之である。北支那の風土の空氣が乾
燥してあるから、冬も寒い時もある。地味も亦
一と云う。この全く日本を思ふ能くする。支那の
木



の日本傾斜の山が起伏し、その間に杉木が
よく生え、素く又くは丸く、葉のやうに又くは南
支那の米穀のこぼれと首肯するの如く、大陸の
支那の一特徴である。

日本人のこの領土をたゞ支那中部の地帯
である。この南支那のやうに、深石の如くある
が、史蹟と風土の如く、南支那の中部支那である
蘇州の抗物も、この地帯、蘇州の風土の如く、
いかにある。吳の都がある。例の姑蘇城の宮
山寺の古蹟も、名所の秦淮河の如く、在る
抗物も、西湖の如く、銭塘江もある。そして地
の中部の山嶽も、廬山がある。日本人からたゞ

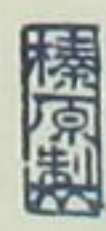
わく詩文の地名を知つてゐるより多くの中野であるが、西
湖は日本人が七条其風景を想像して陳州と共々日
本の七八日景を擬してゐる所である。保小定地
の大きな山を描くは標本とする所である。保小定地
其地を踏査して見ると、秦淮なるも七景其景は寒の
ころ、西湖と其ありて移すをえて期待をわけてゐるや
うな感じがする、往々人を失望せしめ、西湖のこんを
安か上日本の風景と換へて日心の極たるもの、其際
に、あかしやその橋や塔の景も名を彩つてゐるが、多
いから、**舟**、うろうく、春急、思ほも下せまひ。由未支
那の文政が多く、其の風景と美と添へてゐる。其
上は詩文の風景を彩つてゐる。支那の風景



と詩文が倦むより、その所へまゐる。風景の詩文は、其の
の程詩文が、風景の趣を補つてゐるから、風景の詩法
に、たまに、このこと、いふと、汪志七、其の、日本人が
實地を踏んで、其の、詩文の、定信を、信
じて、かゝる、支那の、定信の、天才の、ある、こと、口に
氣がつく、である。支那の、詩人、も、庭園、入つて、見る、こ
も、早、景、の、凡、の、風景、を、巧み、に、現、れ、し、極
難、か、夫、船、を、揚、げ、し、ある、こと、も、其、の、一、感、する、こ
と、も、三、十、三、の、か、る、こと、も、其、の、一、感、する、こ
と、も、一、つ、と、言、ひ、し、る、こと、も、其、の、一、感、する、こ
と、も、其、の、一、感、する、こ
支那の、風景、七、七、の、年月、と、任、て、其、境、を、変、化、し、て

リし北京のいんちきあるかぢんちん、例へば西湖の景は
の一角の雷峯、ハ橋後、昔が杭州城を陥れた時、
崩壊してしまつてゐる！ 日樂天の琵琶行の
いんちき、瀋陽江に、今ハ水路が埋まらうと、四方
から、まうてゐることを、業滄の妻の甚しく、名園を
とて、概ね、景境、を、一と、あつた、ひとりの、か、い、ら、ぬ、あ
ハ巴蜀の自然の滄勝や、廬山、泰山、の、巨、嶽、の
幾千年の世の变化を、睥睨して、毫も、異、な、る、所
なく、今、は、柱、を、總、膝、して、毫も、傾、植、を、減、す、こと
が、無、い。

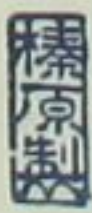
支那の庭園、感嘆するもの、いふ、故、り、無、い、何、ん、と、ま
る、る、命、の、庭、園、茶、金、成、の、三、海、萬、壽、山、と、い、は



理想的の、い、ん、ち、き、と、い、ふ、無、い、景、は、自、分、の、い、ん、ち、き、
の、和、人、の、庭、を、見、て、是、れ、ぬ、か、い、く、ば、く、え、れ、る、の、か、ぢ、ん、ち、
満、海、の、氣、か、ま、く、グ、ロ、テ、ス、ク、の、清、厚、の、味、が、多、い、石
を、置、い、て、あ、る、の、を、見、て、も、是、ん、が、セ、ン、と、い、つ、ま、い、れ、ば、あ、か、
り、芝、居、の、舞、台、と、い、か、豆、か、ん、て、是、ん、が、馬、鹿、と、目、か、つ、
く、概、し、も、樹、木、の、繁、く、か、ま、く、ぬ、か、あ、つ、も、濁、つ、て、あ
る、不、満、快、ひ、あ、る、。又、園、路、の、北、京、の、公、園、と、い、う、て、あ、る、
帝、室、の、葬、苑、が、流、石、と、起、成、し、て、あ、る、大、湖、石、を、い、ち、
茶、金、成、の、宮、庭、深、く、豆、か、ん、て、あ、る、の、が、完、全、に、此、の、
人、の、跡、を、見、ら、ぬ、所、に、初、め、て、い、ふ、心、持、が、あ、る、。日、本、の、庭
園、も、實、に、支、那、と、同、じ、と、い、ふ、か、あ、る、が、支、那、の、如、く、清、
厚、の、い、ち、味、の、ま、い、の、い、茶、造、が、然、ら、し、め、れ、よ、う、と、い、ふ、

うと感ぜざるを得ない。

支那の各園をいふ人工の加ひつゝ美をうへてあるもの
ハ歳を造りて赤瘡は悔しむべきの略々發想せら
ること、修養をいふくさるべしと利を回想しん
い、情のこころあるかじむを得る運命であるの
歴朝の名園がそんなと集りてあるものも微し得る
九、多量にあると直して此の運命の免かぬ
紫金城のまある北海其他二海の景物も萬壽山す
ら七いつか同じ運命の際合するものもある。唯
れどんまことかあるも瘡癒しつゝいふもの、自らの風
景心、支那の風景のえんじである。支那の名園や人工の加
ひの風景や寺院をいふ、今心づけて見て置かぬ



必しも悔がある。支那の此の將來と云へるも名勝
保衛人ともいふか起りつゝと思はんも、外面が如何に
来ると、どんまの欧米化して支那の特色を一手しき
や七いふもの。

(五月九日記)

○此の自分の開教後遺が日記とて、よる讀むと
教員と日記と押さ位がある。何れも清濁は必
のこの書物がある。方々々々、空を七ある山刊出の
平均一冊位あるが、是れ敢て執筆にあらぬもの
である。教員の序に述べられてゐる(る)巻の本の容
易な兄あつた、讀んで見ると、思ふ本は、坊々七
いふもの、殊本古新造り、今我唐してある、
又世の介して多くあること、活利であること、本七、

自ら自分の後をいさうと欲するものではない。多くの書
を揃へてある書店を巡つても(その名前のもの)は見つかる
いよに、何々の書か見たいと思ふが、あつて探さぬもの
いろいろ往々予を告ぐやうに聞く。必ず書店先に出してある
之物を必しもいさうと欲するものがある。却て書店に
出さぬものもある。その名前の書か、紙や衝刺の投げ
まうの店に居てもと捨つて上げてもいさうと欲するもの
とまふと自分の或る特殊の研究をこの為め、是れ
に意を求めぬものもある。古くは() 種をい
さうと欲して、自分のマルキリ知識の百い或るものを
いさうと欲するものもある。西洋で著名の人の心と觸れて見



くまらぬ、世界の大事業に關する道著又一章目を通じて
此れと思つて、いさうと欲するもの、偶れもある。購ふ
やうな譯が、人が不審な思ふやうなものを、時々購ふ
(本) 柳() を時々いさうと欲するもの、其一例である。自分の
の地帯を、書くのか、日課のことくもあるが、() 時
の施方を、いさうと欲する材料を得ることもあるが、美
ハ極めを稀に、いさうと欲するもの、ヒントを得ること、() 種
々ある。兎角、海のもの、動物の、後をいさうと欲する
もの、いさうと欲するもの、() 本を、探さぬ、() 而して、()
いさうと欲するもの。

良妻

西洋の諺に「無妻に次いで良妻」と云ふのがある。これは言ひ換へれば、無妻の方かよい、強て妻を持つてと云はゞ良妻を持ちたいと云ふので、随分苦しい言ひ草で、人事の尤も大切とする結婚を否認せんとしてゐる。これに依つて西洋人が如何に細君に困つてゐるかが想像される。全體良妻はどんなものか、ある人は云く、妻は愚なるに限る、愚妻こそ良妻である。これも激する所があつて云ふことで、愚は良妻の條件でない。賢であつても良妻なるを失はない。良人をよく理解し良人と琴瑟和するものであれば、賢妻こそ良妻であるが、兎角賢妻は良人を蔑視したり貞淑を無視したりして己れの能を誇つて、跋扈跳梁、仕末にゆかない所から、寧ろ妻なきに若かずの歎聲を發せしめてゐる。我國にも賢妻型と云ふ一種の婦人があつて良妻たる素質を缺い

てゐるものがある。警戒しないと、西洋の諺が日本にも至言とさるゝやうにならう。

川柳の碑

觀櫻がてら墨堤に散策し三圍社の境内に入つて見ると六世川柳の句碑がある。それには「つまらぬといふはちいさな智慧袋」の句が刻してある。これは川柳の辭世であるかどうかも知らない。亦三圍に因んだ句とも思れない。卒然讀むと、川柳式の辣味もなく、一向つまらない凡作で、なぜ此句を刻したかと怪しまれるが、再考するとなか／＼含蓄がある。世の中の種々相を無意識に看過すると、何もかもつまらんやうだが、智眼をもつてこれを見ると、何もかもおもしろい。川柳氏などは世間が看過して一向頓着しないことを取り上げて常にそれを詩材とする。そこに本領があつた。斯う考へると此句は決して平凡でなく、よく其の本領を道破したとも思へる。

日誌

私は長い間日誌を書く習慣があつて、若い頃から今日まで續いてゐる。何んの用にもたないが習慣となると廢することが出来ない。但し始終一定の冊子を用いてゐる。來たつたから、世間に作られてゐる當世風の日誌を曾て遣つたこともなく、亦それを氣をとめて見たことも無つたが、或る日の書物漁りに書肆の店頭で堆積してゐる日誌を見て愕然とした。それは種類の如何にも多いことで、曾ては博文館の日誌がよく賣れるなど聞いたこともあつたが、其頃の日誌の構造は一應調法に出來てゐるに過なかつたのが、今はあらゆる方面に應ずるそれ／＼の日誌が出來てゐる。記入の諸欄もそれ／＼工夫されてゐる。これ等を一々擧げることは煩瑣に堪へないが、一二念入の工作のものを擧ると、日誌を書く前に、要件を先づメモに略記する要ありとし、切り

取りの出來るメモの添つたものがある、又今日と昨年の今日とを比較したのがあり、甚しきは三ヶ年間の毎日と比較したのさへある。尙ほ驚ろき入つたのは日誌に錠を装置したものゝあるのを認めた。すべて工夫に工夫を重ね、調法がられる新案のあるだけを腦漿を絞つた結果は、驚ろべき發展を見る。日誌を書く習慣が各方面に起りつゝ、ある反映かと思ふと喜ばしくも感じたが、實は自分の實驗から云ふと、多くの日誌に工夫された工作が寧ろ繁に失して却つて使用に不便であるかに思はれた。いくら調法からと案じた特定の諸欄も實地に於ては常に閑却され、何も書かずに仕舞ふのが常であるから、諸欄で紙幅を狭ばめるよりも紙幅に餘地の多いのを寧ろ可とする。自由日記など云ふのは繁瑣な諸欄を置かず、勝手に書かせる趣向で何んの工夫もないものだが、實際の用はこれに限る。實は多くの日誌は意匠倒れをしてゐるやうに思ふ。尤も或る特種の學藝的其他専門的の日誌におよそ必要の書込欄の置かれてゐるのは除外である。昔しは日記に野紙を忌んだことすらある。野紙があると見取り圖が書けないから、畫の書ける人の日誌例へば渡邊華山の

などは無界の薄葉を用ひた。斯やうなことを思ひ合はせると、複雑なものとはよくない。餘りに複雑であると、さなきだに筆無性の人達は、折角志した日誌をつける氣が挫かれるから、日誌を書くことを獎勵のためにも餘りに工作を弄することが却つて目的に反する。

畫幅の格好

近來の畫家が展覽會などに出す作品を見ると、在來の型を破り、額にするとも幅にするとも豫定を立てず、衝立か神社の繪馬額でもあるかのやうな恰好のものを書く。概して豎が短かく、横が長く、段々正方形に近くなりつゝある。こんな形の作品を現在の日本家屋に入れてどう取扱ふべきか宛がら西洋畫を贈られて仕末に窮することき観があるが、これは畫家に云はせると自由にして都合のよい形だと云ふてゐる。平福百穂の竹窓小話に云く、

(前略)かくの如き方形が作られる様になつた理由は、もとより一様ではない。西洋畫が方形の畫面を採用してゐるといふことも、日本畫の方形になるために直接の影響があるであらう。又畫面が非常に

大きくなると畫面の形は自然に方形に近くなる。しかしその重なる理由は、畫面が著しく寫生的になつたことである。自然に對して寫生的な態度で、自然の一部を切り取つて之を畫面にまとめる事になると、方形は尤も便宜な形である。もしその幅が上下に長いと畫面に餘白が多くなつて、それを埋めるにはどこかに無理が出来る。この畫面の束縛を脱して自由な自然形を其儘に畫面にするには、方形或はそれに近い形が最も便宜である。

按ふに徳川期の化政度并其以後所謂「行燈」形の畫幅が行はれた。これは方形とは云へないが、上部を切りつめたものである。この形が書畫界に嫌はれたことも久しいが、それよりも更らに切りつめたものが畫家に喜ばるゝやうになつたのは家屋の裝具たることを全く度外に措いた仕打とでも云ふべきか。全體畫幅の形は頗る區々で、茶人風の幅は茶室の床が小さいのと斷簡零紙などを表装するので幅の形が自然小さい。尙ほ又床に卓を置き花瓶や香爐を其上に置く所から、横幅が茶室に多く用ひられた。南畫を喜ぶやうになつてから長條幅が行は

れ、幅が狭い割合に縦の長いのが恰好がよいと、今も書畫屋は幾パーセントか多くの價を附するが、これも其内に變ずるであらう。現に南畫も漸やく餘白の多いのに困んでゐるかの觀がある。しかし山水を描くに餘白をのこさず書き埋めてゐるのは面白い工夫で西洋畫にない意匠である、これに就て百穂は云く、

東洋の畫面が正方形でなく、著しく長幅であつたり、横卷であつたりするのは、それだけの理由がある。東洋の山水畫にその中に住み且つ觀る心持で畫くやうにといふことは、既に宋代から注意されてゐる。自然と遊觀する心持で、山水畫を描くことになると、西洋の風景畫のやうに、一畫面一視點のものとならずに、その視點は畫面中を道に沿ひ或は川に沿つて動き行く筈である。視點がかくの如く動いて自然を誘ふならば畫面は上下に長くなるか左右に長くなるかするであらう云々

一畫面一視點の西洋畫が果して畫中の視點の動く東洋畫に優るかどうかは研究を要することだが、視點の畫中に動くのは南畫の心髓の繋る所で、一概に之れを排すること

は出来ない。南畫にあらずとも日本畫に多くの餘白を存じ、背景を觀者の想像に委する點も寫實主義の爲めに破壊されてはならんと思ふ。

園 丁

自分は前年郊外に幾許の地を購ふた時、そこに自分流義で庭を作つて見ようと無謀な考を起し、有り合せの樹木でいろ／＼試みたが、迎も思ふやうに行かないので、さ／＼庭はむづかしいものと感じた。今の宅を定めてから年に二度は必ず園丁が松などの手入れをやつてくる。その時多少庭の模様替をやることもあるが、園丁は斯道に修養があるだけに、到底自分は及ばないと感じたと云へば、それは當然過ぎるほど當然だと人は笑うだらうが、實は多少腦中描く所があるので、それを如實に行はんとすると、一木一石と雖も自分の意の如くならないのは如何にも情けない。そこで園丁に相談をかける。彼等には即座にチャント案があつて、確かに自分の胸中の案よりも優つてゐるので、自分はこれから園丁に聊か敬意を拂ふことになつた。通例どこの家でも園丁が他の勞働者に較べて頻々と休憩す

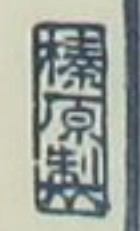
るのに苦情があるが、實は園丁は必らずしも逸を食つてゐるのではなく、其の喫烟しながら椽に憑つて庭を眺める時が彼等の思構を鍊りつゝある時だ。例へば一石をすへるにも、どこに置くべきか、如何なる向に石の面をあらはすべき歟等この休憩しつゝある間に多くは決するので、必ずしもズルケテ時を偷むのではない。すべて精神的の工風を要する勞働には多少考量の餘地が無ればならぬ。作庭も實は畫を作ると一般、一枝をおろすにも樹の風姿如何と案じねばならんから、彼等が時に憩ふて烟を吹くのは畫家の筆を握つて案するのと一般であることに思ひ到ると、彼等に多少の敬意を拂ふことが當然であるやうに思ふ。



古々佩筆

神保町人園長等元高士珠全也... 古々佩筆

の石濤和名と名を齊あしめしを畫僧八大山人の傳かハ情園
 大なりは傳りし以判り南畫鑑賞「雜流」の載つてゐるが
 とる首端のあまや文があやうい。先づ其良室の傳を
 後とことしある。殊、ゆも感するの酒を飲ふと
 狂かぬまうといふ所ある。彼人の傳の支那の傳をハワ
 キリしもの。或ハそのの王室の血をまけれ貴族の
 清静の味を免かんといふもある。其の凡貌の白
 紙の感の存する。その境概の氣を湯づ、其の藝術
 此秀逸なる、其の傳に隱ん居るも、新晦してゐる貴族
 といふ所ある。此點ハ良室に似通つて所ある。
 彼人の傳も畫を以て送し人問業の所ハ、彼人が行状
 傳ハ油和生流に保せられて其れ油和生流の所ある



ちうに思ふ

世人此僧の畫を愛する
 ことをいふ、而も其傳
 を愛することをいふ、
 其人をいふ、其の

清朝の康熙四五年のころ、江西省南昌の城下に一人の風頭
 がある。年はもはや不惑を一二過ぎてゐたが、何處の何者とも
 わからなかつた。彼はいつも布帽をかぶり、領袍をながたと
 曳き、踵の擦り切れた履をはいで、袖を拂つて蹠蹠として毎日
 市中を歩きまはつてゐた。永和門から順化門の方へ、順化門か
 ら進賢門の方へ、進賢門から惠民門の方へ、惠民門から廣潤

門の方へ、廣潤門から章江門の方へ、章江門から德勝門の方へ、
 またこの反對の方向をとつて毎日市肆の間をうろつてゐた。
 けれども彼は別に人に物を乞ふやうな様子はなかつた。たゞ
 あちこちを憂鬱に眺めまはして、獨りぶつぶつ呟くのみであつ
 た。そして狂つた頭で曩日の記憶をたどつて、感慨に打たれ
 もするものか、時には腫が異様に輝いてゐることもあつた。彼の
 の顔は少し頰く丁脹れで髪が少く、どこかとぼけてゐたが、不
 思議にも犯し難い氣品が眉宇の間に漂つてゐた。
 彼が通ると子供たちは後をつけて諷しく騒ぎ笑つたが、てん
 で意にも介さぬらしかつた。彼は唾で口がきけなかつた。人々
 は目と手振りで彼に話したが、彼は自分の意に合へば頷き、さ
 もなければ頭を振つた。そして自分が話すときも手振りを以て
 した。人の噂によると、彼はもとは雪個と云ひ、高僧であつた
 と云ふことだが、誰も詳しいことは知らなかつた。
 初めはたゞ靜かに市中をさまよつてゐるのみであつたが、日

増しに狂疾が昂進してだんだん狂躁になつていつた。そして今地に伏して嗚咽してゐるかと思ふと、忽ち天を仰いで大笑し、笑ひ止むかと思ふと、忽ち跣跣踊躍して、叫號痛哭し、或は腹を鼓いて高歌し、或は市中を亂舞すると云つた有様で、一日の間は顛態百出し、市中の人もこの風頭にはほとほと閉口した。一日あまり擾ぐので、人々はこれを悪んで、酒に酔はせたが、酔ふと不思議にも彼の顛狂はやむだ。これ以来人々は彼があまり擾ぐと酒を飲ませたが、酔ふと必ず彼の狂躁は鎮まつた。

かくのごとくすること歳餘にして彼の狂疾はやゝ癒つたが、やがてこの奇怪な風頭が、書法を善くし、畫に工みだといふ噂が誰云ふとなく擴まつた。想ふにたまたま微酔したとき、筆墨を借り、手に任せて揮灑したのを見たものが云ひ擴めたものであらう。彼の書には晉唐の風格があり、畫は成法に泥まず、生趣油然として逸氣があつた。見る者は皆驚異の感に打たれた。初めは狂人が書をかくといふので、單に奇異に思つたぐらゐであつたらうが、多少眼識のあるものは、この人の目をそむけしむるやうな狂癡な風漢の頭腦から、どうしてかういふ惻惻として思ひを興させるやうな奇怪な鋭い美が生れるものかと、不審に思つたにちがひない。

りするやうになつた。彼はいつも酔へば欣然として潑墨し、廣幅には散帯をもつて漚ぎ、敗冠をもつて塗抹し、然る後に筆を乗つて渲染し、或は山林を成し、或は邱壑花鳥竹石を成したが、おのづから天然の致があり、一として妙に入らぬものはなかつた。また書を請はれると攘臂して筆を乗り、狂叫大呼してたどどころに數十幅を成したが、惜氣もなく皆人に與へてしまつた。然し一たび酔が醒めると、片紙隻字を求めても、彼は頭を横に振つて頑として應じなかつた。たとへ黄金百鎰を前に積んでも、恐らくは顧みなかつたにちがひない。彼は自筆の書畫には大抵八大山人と款題したが、これを必ず二字づゝ畫をくつつけて書いたもので、ちよつと見ると、哭之、笑之といふやうな字に見えた。この笑哭には深意が寓せられてゐるのだといふが、或はさうかも知れぬ。つまり一管の筆を弄して、或時は之を哭し、或時は之を笑つたのかも知れぬ。そして

幅強數十年 只弄一枝筆 筆は無根花 日日常結實
千千萬萬顆 顆顆如紅日 日日採將來 布施十方佛

つてゐる八大山人ごらんの

の毎の筆蹟に後々来る、書蹟のむすび寂寥と破る、
自んか何々々々々の物に於て其を愛する、此の如く神を
いたし、その、中流の如く、画集(中二巻)がある、
二巻が、湖石五十年紀念の、中流の如く、
早大出政部、去政し、つくは、集行、
お馬、海山の、
年史、
ある、
中山、
つて、
開飲、

この奇怪な風漢が、即ち石濤、石溪、漸江と並んで清初の四大畫僧と云はれ、今日四王吳惲などよりは、寧ろ高い聲價を保

の七一息の著。東洋全集の四巻沈論を収めるの
で難読の文だが、余り苦心して得た名山の主人の
愛一は、東洋の一生涯の日記が全部収められて
えが全書の白眉である。巻頭は四巻沈論
を宮廷、就北時支那の指令の文書が載せ
ある。よき予が久しく待たしと望んで中
世つれよのひである。七巻品の雅行と出政し
くく一般に愛んがしき。唯北極市をよめる
如き縁取者いそぎの。出政も喜こみ、巻首に
目合七巻を田舎のいぬ。出政を近刊のつく
は集行録(上巻)の福井久花著の係り、二十行
の多くの同書を集めて校勘し、所々傾かある。



此書は室町時代の勅選連歌集の、連歌のオーソ
リテリである。曾つて版こそんれことかき、
本とて傳りつた。が、結言の誤りが多いり、
是を行正する。努力これのいそぎ、まことよ
め江編年史の南時の終りに記す。と集成し、
ふ七編の集めて助成を。毎月一冊を定
期に十二冊に及ん、日夜歌集の、
出政の、
る。とと、
物と、
一巻は、
百科辞典の、

華元百貨店一取と日家利の標をとりて家利の印
約十顆目の印影がぬりである。 五月十日迄

愛玉子の説明及製造法

臺灣の特産品愛玉子は本島語でオーギョーチーと申します丁度無花實によく似た實で中の種子にて製られたるものは夏季清涼飲料として一般に愛用される珍品で御座います

一、製造法セルファンの袋に入れて有りますのが約五人前の材料で御座いますこれを布袋に入れて袋口を糸でかたく縛りバケツに清水一升入れ其



の水の中で丁度糊袋で糊をもみ出す様に兩手で約十五分間もみ出しますと愛玉子特有の粘液を全部もみ出す事が出来ますこれを靜に約一時間置きますとトロコテンの様に固りますこれを小さく細切にして氷水と砂糖を入れて飲むのが普通で御座いますがさらにレモン等の香料を一寸入れて飲む時は一層珍味を加えます

臺北市榮町

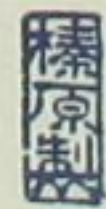


菊元百貨店

島産部

在景湾の山中熊から守りてんた愛玉子の先年
試みしれいふある外顔のあつた酔い、其中の種子は
無果丸の種子のやうなもので、まをみといふ
布のまを包むか七み出すと、昔のやうな籠りし
いよみか出来ぬ、まをみは砂糖をわすれし
清涼劑が出来ぬ、まをみは此の報條の
まをみ先年此果物のボリニかん先年証を
まをみは此のまをみもあつた、まをみの
まをみは此のまをみもあつた、まをみの
まをみは此のまをみもあつた、まをみの

○富山縣の和任の才女千代尼は生涯獨身であつた
此と異説も傳へる人がある。このまをみは歌集
の序にもまをみもあつた、まをみの



千代尼の生年と没年と、此のまをみは、起きしるつ
法かゝるの伝へる夫、まをみの句が、コナナ句が
るから有夫の女と通つてゐる、此のまをみは、
この句が千代の句と、まをみは、此のまをみは、
代は此と誰か、作か、而して、此のまをみは、
と、此のまをみは、此のまをみは、此のまをみは、
此のまをみは、此のまをみは、此のまをみは、

千代の年同、此のまをみは、千代尼の巻末に、
人々の手向けの歌や、此のまをみは、
左の和歌のまをみは、あつた、

二万五千の生れ、加賀のまをみは、
やうに千代と、まをみは、

○新巻の原宏平がの次四年 京都二入の晴蓮月
尼と詠ふに詠が宏平得玄の詠に、折角詠を思ふ
不在にありに、一首の歌を古き我しに

一熟うまきおびゆらけはとまきす、ぬんてはぬしおひ
やまうまき

蓮月日立言があつて、守を巻つたを、あつたに、
を思ふと、呼び入る、侍りを、こふれを、謝し、是を、
して蓮月の和に歌ん

い比つらん君をかくて、かまとも、ときす、いとや、
かちす人さし

宏平の詠、蓮月ののりけ詠、蓮月から鳥の原の
詠、蓮月詠、詠と、心動の、その女と、深い、
あつた



の詠、蓮月の詠、のりけ詠、蓮月から鳥の原の
詠、蓮月詠、詠と、心動の、その女と、深い、
あつた

○新巻の原宏平と、蓮月ののりけ詠、蓮月から鳥の原の
詠、蓮月詠、詠と、心動の、その女と、深い、
あつた

比らる。哀心の色は死の日に死に取つた女に、不行状のこ
 との夢にこそおぬ。死ぬるに在る福の、ことめで早くと
 長くと別れ、花の心とわらう。と云うてある。柳嶋、
 お住もやうなるといふ、柳嶋は女のわらうに付事いんで、
 柳嶋の海峡を見て、さういふおんて住して云うて、良
 賢と成候の出来、程和死をいふし。使てんといふ良
 賢の心の侍、つてある。北の書留、さういふと云いん
 る。唐の處に盜賊か入つたか物をいへとも、お住もあ
 つたこと云うてある。長賢の夢、お住もあつたと思ひん。思つた
 ういふ道心の、おんて女のあつたことを、漸や、お住も。北の尼
 のお住も今の冷る、いへてさういふ、お住も。と云うてある。

○所迄の程は、お住もに鏡燈の剣を提げ、鬼を
 小服に抱く、ある。回を、高き、お住も、お住も、お住も

大勢の呼酒、お住も、お住も、お住も、
 酒一寸丹心三尺金、揚卷、先試、優人

作中の志士、酒次、お住も、お住も、お住も、
 お住も、お住も、お住も、お住も、お住も、
 鏡燈の剣、お住も、お住も、お住も、
 余の奴、お住も、お住も、お住も、
 余の奴、お住も、お住も、お住も、
 余の奴、お住も、お住も、お住も、

○都立人往々一奉巨財を失ふ、吝するも消極として
已に能はず、積極を出て、此の厄に當ふ、未だ未だ能
ずん^老の失はざるんとするもの人えを失ひ、鉄利を
争ふよ一奉或は全財を失ふ、天の配^前を^七
へき歎、余の視る人に斯くもあは、甲は蕃^七
してやらん、此の相違は失敗す、百茶白の失敗と云
ふから痛椿に相違する、敗者百萬山ありと云ふも
不動産も包括する、から、一奉百萬山の積集を
拂ふこと、身代限^七は比すべき痛^七を^七ある者
若くは對する天遣恐るべし、政商往々此人の地位を
失ふらん國家の重なるあり、地金を出してお飾を
張る為は一身を誤る、此の教^七は^七件^七に^七定^七ぬ^七人



あり、類れ事件に軍人収結の事あり、都立のあはれ
を報^七は^七る^七に^七身^七の^七子^七に^七爲^七る^七、^七報^七志^七の^七想^七す^七の^七ら
す、^七と^七ま^七す^七。

○昔冬降雪多かりし為の樹木の傷むことあり、
雪回りに於ては極るを善とす、雪時と曰ふは、
故を聞くに、小倉のらあり、^七六^七窮^七して^七若^七芽^七を^七塚^七み^七去^七
り^七故^七と^七、^七左^七も^七人^七多^七く^七の^七倉^七の^七雪^七深^七く^七解^七を^七得^七せ^七
こ^七も^七人^七御^七死^七して^七屍^七を^七の^七こ^七も^七人^七多^七し^七と^七、^七後^七の^七雪^七に^七
^七と^七ま^七す^七、^七後^七の^七今^七も^七推^七雪^七回^七に^七入^七の^七事^七も^七、^七世
界^七に^七比^七は^七る^七事^七も^七、^七五月十三日記
○自分の家と父祖傳来の骨董書畫を賣り、幾許も無い
自分の遊中、家の弟に任してある、^七東^七家^七を

定め子家と傳りし付異身他一物も身つれ宜く先考か
辰田、故らう、吹賣却り附り此家付、いどん名いあつれ
か分んが此時、概分敷いれので、大人か上京こん此時
何物も哲帶、さんきうり此唯れ聊、又故類ハあつ
れが、こんの賣却、も履うきい、自れ残つれをある
自分も追々骨量の減味ともつやう、まづつ、何、父祖
の手評品を得れいやう、**欲**印か記つれが、御里
敷、**乱**してあ、平家の舊物品、内容も、平よ入らるか
つれが、親戚の家、なま、そのを貰うひ受け、其、
の人、が平家の押ひ物、**一**此時、後、札、平よ入んれ、**一**あを
追、**一**價を以つて、**一**薄つ、**一**らん、らん、**一**い、く、**一**ば、**一**く、
七、**一**が、**一**平よ入つれが、骨量、**一**款、**一**誠、**一**さ、**一**う、**一**う、**一**た、**一**い、**一**つ



どやの虫干しに家と傳りしものを長持、又、後、合、い、食
し、**一**も、**一**賣、**一**ず、**一**に、**一**保、**一**存、**一**し、**一**れ、**一**い、**一**と、**一**日、**一**録、**一**を、**一**心、**一**つ
此、**一**も、**一**あ、**一**る、**一**が、**一**幸、**一**ひ、**一**と、**一**火、**一**災、**一**を、**一**免、**一**か、**一**ん、**一**大、**一**震、**一**出、**一**た、**一**無、**一**事、**一**に、**一**任
道、**一**し、**一**た、**一**り、**一**か、**一**一、**一**物、**一**も、**一**失、**一**り、**一**ず、**一**に、**一**あ、**一**る、**一**今、**一**左、**一**記、**一**憶、**一**り、**一**あ、**一**る、**一**もの、**一**を
書、**一**き、**一**う、**一**け、**一**も、**一**あ、**一**の、**一**注、**一**を、**一**附、**一**して、**一**互、**一**く

瑞澤大研

代出海安手付

古銅象眼からよあ茶筒

今出花品

かくしの笈局

今出花品

古銅象眼茶壺

以上三點、**一**今、**一**家、**一**と、**一**あ、**一**る、**一**は、**一**あ、
る、**一**七、**一**先、**一**考、**一**か、**一**才、**一**と、**一**其、**一**へ、**一**此、**一**も、**一**か、
あ、**一**る、**一**皆、**一**珍、**一**品、**一**也、**一**今、**一**出、**一**花、**一**品、
曾、**一**祖、**一**父、**一**の、**一**志、**一**道、**一**と、**一**傳、**一**り、**一**也、**一**ん、
よ、**一**曾、**一**祖、**一**母、**一**と、**一**特、**一**に、**一**余、**一**と、**一**贈、**一**ら、
れ、**一**也、**一**

茶箱 茶具一切入

以上三點、**一**今、**一**家、**一**と、**一**あ、**一**る、**一**は、**一**あ、
る、**一**七、**一**先、**一**考、**一**か、**一**才、**一**と、**一**其、**一**へ、**一**此、**一**も、**一**か、
あ、**一**る、**一**皆、**一**珍、**一**品、**一**也、**一**今、**一**出、**一**花、**一**品、
曾、**一**祖、**一**父、**一**の、**一**志、**一**道、**一**と、**一**傳、**一**り、**一**也、**一**ん、
よ、**一**曾、**一**祖、**一**母、**一**と、**一**特、**一**に、**一**余、**一**と、**一**贈、**一**ら、
れ、**一**也、**一**

衣箱箱

差人用千箱 棧の作用あり
蓋をひけの段向の桐木を菊
の装飾あり 大人千字の
袋

若箱

袋の箱 常用品 袋の起
銀あり

印箱

四方細刻の画あり 長方形を
抽子二、先月の印を収む

刀 五挺

先考受持品 五挺 一挺八寸
一挺七寸

古鏡

倭鏡より七漢鏡より未だあり也

硯の集

紫檀田工 松を刻す、吳
雪標遺物 花の印あり

袋の箱の遺印 数挺

内一挺有美と刻す

水原縣官印

星島刻 銅印 林琢斎

硯一面

前在一紙所録

白雪翁書程かくし



銅鉛

木印三顆 鈕の松の刻あり

星島刻
先考用印

袋の箱の書中席 掛物

一紙二中席 全席と細書
酒坊前二島と贈るはあり

三枚の白字寸珍徒如也

袋の箱の撰書 碑文卷

白字の市島と松とあり
白字の箱文也

家廟歴代肖像 四幅

家廟素蒙字 一巻

泰嶽簡牘 祖父自筆 帖面

先考書法名銜 主

佛間二圓くやう他はなし也

摺言仲氏易

袋の箱の八人字 箱の袋の
題書あり

朱唐書袋の三文字

送人用字箱 棧の作用

休久問家山楊文仲氏易序跋一卷

秋月程樹同上序一卷

祖父詩稿 靜信館詩稿自筆

祖父書春夜枕李園小屏風下り

各家之歴史 祖父自筆

系譜 二通(一)通 先考自筆本

久澄の自書 和家氏

自為口志 五同上 祖父自書 叔父の自書

田房遺墨 一卷 家系遺墨 二通

曾祖母歌集 久澄自書

家系遺墨 書 海防の官海防の記 二

家系自筆本 二 皇國合統記 日本地誌

家廟遺墨 家族の書簡卷

和家山の家之記

和家久澄為征村官御成之記 二

和家久澄自官本

皇國合統記

日本沿革地圖

得所詩稿 叔父の自書 遺墨

古柳詩稿 丹兵衛記 筑木吹文詩稿

進志園記 全家自定之記

先考并哥意義翁口言大日本史 零本

武海翁詩稿 二

五才集
寺坊書畫
十幅

月畔分刻百題
及卯雞
石歌

先考自寫
鍾鼎字源

同
復古編

先考自修
字典

先考自寫
集古十種
印年之書

鐘鼎書
鍾鼎字源

岱海文集

版本

鄒休庵

和風国歌集
版本

冰室集

久次歌集
版本

趙凡夫印譜

岱海自序
本
花記

六書通

同上
快
岱海自序
花記

法帖

淳化

同上
岱海自序
花記

史記評林

予の家
花記

三回志

同上
先考
相書

塊存文書

アハ心
抄り
三三

余
任歴
関了
文書
を
収
去

古証文

一束

徳川朝
瑞居
之
管
一
竹
借
金
証
文

前原一誠書幅 并千詞

余の何名ある幅
忠孝の義四字幅

奥平道輔書幅 四

詩幅三
雜文一

曰

新文 芳庵の詞も文

秋月種村書幅 三

余の家に来泊の時
押書也

名和俊書幅

大原孫長六官余の何時
白紙と交けられたり

壬生卿美疑二字額

美疑の美字の辨也

高田吳江畫 小點

余の家で贈り物
吳江の書法也

西條克人画幅

丹其氏画
竹田の人

金華おゆ書 二幅

武原の先

此幅も余の家の蔵にあり、六十一世此裡あり、亦長持一杯に入

んぬら、他の蔵にもござり居るもの少からず、其内此即



類と爲りしもの取りりしけ、別に保存し、散乱せざるやう致し

永享十一年五月十四日記

○粉林とよみよりの、のち特徴らしきものがあることを伊東

忠大の抱きしめ、流し込む。而も京の寺院の廊下

の椽に懸き、掛りと云いんこのかある、あつくと云うく、

師言をゆふも、まゝの大工が技工を弄し、以て人の信せ

ぬるが、まゝに謔か、粉林の年を延くと乾燥する、此の

度をも減らから、当初キツレリ、板と板と、互を七隣

が、毎つたの、段々緩む為り、歩すと、音響をとり、

この心、おと、石、思、偏、七、枝、巧、も、まゝ、い、と、云、い、も、あ、て、あ、る、の、亦、粉

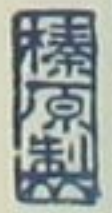
の、亦、外、面、板、の、七、柱、を、人、間、の、手、が、觸、ら、と、手、の、指、が、附

着、し、と、違、り、年、を、磨、ら、と、是、福、也、が、日、の、手、形、足、形、が

現いんてまゝ、拵拭しを清しと扱けり。京都の養老深
 院と血天井と云ふのがある。まゝの暗禍を血天
 井といふ。●千早の形が印せんとある、まゝひきひ
 の板山城を城の時勇士●か城を扱、自殺せし時の血
 痕が、紅念の者の女の板をこきと用ひて天井を染つ
 たるといふのんてあるが、いんて大らう、濃か(生)まの漆香
 色か、まゝまゝび千早をつけれ、か現いんていんて(ま)きを
 いとまのいんて、いんて家産造りまの時柱や椽を
 を紙の●巻くの上傷れりまゝ、おと思ひ。

○和四のハ、大依信輝の四、馬琴が以て其へに古詞
を引き若き地味を白牝してあるところありたる如き一節
がある。

(前略)彼の生来漢文をぬんじけんと書述の癖ひが
ありと白牝してある。彼の若年の二年の粗口の料を
得て手紙に送ぎてよむ比と云ふ。随うと四句に
其く此書にこれいやはらう書述にかゝる癖ひが
おとて、綴る癖ひ且書に差支候とかいふ款
きを、随に安んずるも、珠にえ未若此に傳ひ
やうにうりてかゝる、つくく、身なき身を啼りて、天
保八年の殿打氏宛書簡に於て若き處を訴へて
る。



心のはしきの物はせんかゝるきよめに勝るや、かゝる
おろき世海りるんか捨つ豆かや、地を葉もとりま
へば出来のわろきい勿論もへる、内茶を飲む
着官はゆゑかゝる眼をえていさかゝるま
かゝるまといはれ、書一さりとては思ひやうなき
こゝろ、衣まゝも世の人はかゝる書をしるむつた
のいかに若きか、耽るるんと思ひて、この糸
かゝるまのまゝ、流るるをいふ。

と云つてあるが、到時我儘の馬琴が多量なる
たゝしに若痛の程も思ひあつた一味の哀愁
を覚へる。

馬琴の斯の内情は其の書簡を讀むればよく分るが

かまふことである

高は自分のかまふを為すに似るものかたは如く後を
みる

(前巻) 珍中の珍とてんきり「八犬傳」が一時絶版する
つれといふ噂が喧傳をえられたるものである。勿論、左記の
あつたが、その記り或悪戯漢が御書付の偽物
を拵くて、騙しはさういたるにまうりであるが、是れ
流石の馬場も察して、所をり不る其真偽を問合
せたりしてゐる

と云ふ所かの手紙もあつたことか、自分の初めと
ことであるから、こゝを言さなければならぬ。

の和の居士活版の八犬傳と共に江戸文芸界の中心



後本傳に集れぬものもある上、田代文政の御月物語を閉
る来りて金部活版し、秋成の文才と感する所があ
つた。支那の説話をと意譯したやうな、よきといつゝあ
るが、帯心くも遠く味がある。此方の初めの以て、
ルこともあつたが、文政の一向おもしろ味を感するも、
のめを感する程の能力も無つた。自分の心境に入つて時々
者名といひに執心があるうらうら、女實活版のことな
い書物を観望して、性々真をえくることがある。書物
角一旦活版のことのある書物を二巻を観望する氣
あるまゝの、御月物語の短着、此れから、再び観望
の、書物は何れも、度々活版の、見ること、
と感した。と云ふの、年輩や、見識の、同一書物

感にかへて違ふこともある。青年時代の一向異と感へる
 書が夫頃に及つて大いの同感を惹き起すことがある。
 文章の巧拙や含蓄の味も能力もその時のま
 じつくと讀過して、名著とも覚えてゐるものがある
 である。そんな書を読む読人は、いつか讀過したあの
 味を感ずるやうなことがある。實に青年時代の
 讀過の讀書の一失がある。讀んだことのあるか、或
 年輩のうちに教員として、一過讀んだのて存後
 が及ぶといふものがある。遂に其の真味を會得せぬ
 永久に畢るものである。或る本の對しては、讀後といふ
 である。活やくと英書が今の中まで教師が生徒を引
 率いて遠くまで送る時、舊談を折つてあるの、説の



ことをもあつた。生の境、臨むか海もろく、又時々
 何をがあの世を後の有形のもの、存してゐるの所を
 知舞の歎服、何等の感へし起さるゝ。回顧致味なき
 には、級の習○方を要するものがある。切舞の
 古事でも、不於南のことがある。何とていふか、
 修音読のり都へ、りうくの故談を、を乱妄に、かひ散
 らへ、のの、悦も、幼年時代書物を濫讀すると
 一般の考め、言早ら、をる、とて、得る。どう
 七し、いかに、通に、歴し、と、再歴を、欲し、
 といふ、と、教を、と、留を、と、
 書物、武田、十讀、い、べき、よ、か、ある。

通る、い、教、田、一、方、物、の、味、が、違、つ、て、く、一、向、若、若

春心記がす。

(五月十一日)

の毎日の清閑具、折頭に出る都方、新刊の書と購定
括らゆつた能く、例とすうてあつた、幸ひと改下から寄
せたくらうもあつた。あつた前、金星社、現代誌、
全集十二冊を揃けて送つてきた。此全集の内、白
分の逸事、教、中、七、ぬめ、であるが、金星社、
依り、印税が拂く、さうから、簿本が勤業してく人を
てきた。ちり、印税を取、氣もさうい、だから、此(本
を多し、てあつた。此の十二冊の本、か、ま、ん、先、つ、く、日、
贈方の煩、あ、り、分、ま、い、譯、び、自、分、り、逸、事、家、を、云
ん、て、あ、つ、た、他、人、の、逸、事、を、録、り、積、ん、か、居、ら、ぬ、志、が、し
当代の逸事、を、ち、り、目、を、通、して、置、く、為、家、も、あ



る、斯く、望、中、を、ま、し、つ、つ、此、者、の、お、淹、ひ、前、で、あ、る。此、者、が
別、道、一、と、ま、し、つ、つ、二、三、の、ま、く、行、う、の、か、ら、借、り、ん、一、冊、は、し
か、後、ま、し、つ、つ、全、部、を、計、て、の、所、感、ハ、う、い、か、本、書、毎、冊、心
家、十、二、三、八、乃、至、十、四、五、人、心、家、一、人、の、ま、五、六、三、命、を、ぬ
め、し、あ、つ、た、か、ら、總、体、の、心、家、二、百、八、十、八、心、品、の、あ、り、分、千
い、ふ、位、あ、つ、た、あ、つ、た。此、の、人、の、心、家、ち、所、謂、の、逸、事、家
ち、り、つ、つ、各、方、面、の、人、の、心、品、の、内、逸、事、と、見、ら、れ、る、心、品、
を、枚、の、り、よ、ん、ん、が、著、者、を、か、ら、う、望、ん、だ、心、品、の、あ、つ、た、
し、自、分、の、心、品、の、編輯、の、採、擇、を、任、し、た、よ、り、も、七、也、と、
思、ひ、く、の、こ、と、を、氣、輕、に、書、い、た、よ、り、が、多、い、か、ら、後、に、見
て、も、真、が、あ、つ、た。但、此、の、心、品、を、知、ら、ぬ、人、が、十、の、八、九、を、占、め
て、あ、つ、た。兎、角、何、等、の、の、困、又、り、あ、つ、た、人、の、心、品、と、後、に、見、

せうに自分が持った書こぶの北野もあつた。とて場違ひ
あるかどうかを覚えておく。著者の頼もみや狂態を知る
ことが肝腎である。 五月十七日記

○獨りの先生に会いに行くと、ボーン決闘のつぎ登壇
された獨りの先生から教へつれと語りこちいてゐる。左
の如くである。

ボーン、エングレ、ボーン決闘。……の先生から
傍聴せよ。と、さういふボーン、エングレとさういふ日本の
大塚が一本の杖はひき、杖の把手のきの大コップ。ひ
き、ひき、ボーンの飲めつくりをさす。ことゝるの、先生
が、審判をいひ、せう「ゼットー」唇をつけ、
「野合が、さういふ「チートー」飲め」の第二節

審判

合の飲め始める。息を継いでいふ。夏はあつた。一息を
飲み、キートンコップを逆さまにして、一滴の飲め、
残のさういふ、花柄の、先き、いふ、キートンコ
ップを置いた方が、残る。さういふ、さういふ、
飲んだ、流れる、流る、いふ、とある。

自分のめん、ボーン、エングレに用ひる、手柄の大コップを、
持つのである。一回、グレ、飲め、試み、ことゝる。北野決闘の
さういふ日本の、生、行、いふ、誰か、いふ、大合を
信じた、さういふ、いふ、ある。前、飲、日、名、いふ、いふ、日本、二
が、あつた、三、回、目、の、ボーン、エングレが、よ、いふ、いふ、と、いふ、いふ、
スマーク、ヘリ、ング、いふ、いふ、ト、ラー、ヘリ、ング、いふ、いふ、下、物、いふ、
いふ、

あつて作るを端悦を行つてさうにせぬかといふ。口多くの
 文士も思つたお産心いろいろ益も得たといふ。作物を
 讀む上からさういふお産心かといふか。つた方が違ひな
 かい。あつたやうに思つてさういふ文士がいくつも
 ある。ちよとさうして自分と今と反對のことをさうい
 むさか。何とさうして作る自身の観照の上から、女人
 をつたことが邪魔さういふこと一面の真理である。此の
 論法からさういふ人の口多文士も又これ考へて、あ
 の人の修程は、（この）此の理窟は、（この）一哭した。
（この）

口多刊の今田首原個人能流、世塔婆の田か出で、
 おる、世塔婆の柿經ともよまといふ、二枚三枚の世と



年々入るが修つたもの寺さういふあるキリだ、自分かあ
 田の寺か、これの北の田中よあるといふ、此の、法華經全
 部が一束とちりてあつて、空器りあるといふ、珍らしい。空
 器り里り漆を塗つてあつた相ある時代も見受けん
 だ。此の田中よある一葉さういふ
 仲書か、さういふ、と、いふ、珍らしい
 部能と、属する、といふ、阿彌陀
 經の断り、さういふ、と、いふ、珍らしい

口繪解説 石田茂作

平安時代の未寫經がいろ／＼の形で行はれる事が流行
 し、或は扇面に書寫し或は瓦に書き又銅板滑石等に寫さ
 れる事もあつた。柿經もさうした流行中の一產物で薄
 板即柿にて塔婆形を作り之に經文を書寫したものである。
 柿の小塔婆形であるところから一に笹塔婆とも云は
 れる。書寫の經文は法華經が最も多いが阿彌陀經の例も
 ある。其の供養法に就いては詳にしないが一般經塚の如
 く地下に埋めたものもあり又寺の納經の如く一部纏めて
 寺院に納めた場合もあつたらしい。埋納の例としては鎌
 倉覺園寺並美濃國墨股寺址發掘の例があり寺に納めた例
 としては帝室博物館藏並安田家藏のものがある。帝室博
 物館のものは南都極樂院天井裏にあつたものと傳へ安田
 家藏のものは興福寺邊から出たものらしい。

明暗雜記

○川柳で見た家康

四月十三日、岡田三田子氏はAK趣味講座にて「川柳で見た家康」を放送。概要を書くと、

本年は徳川家康の死後三百二十年目にあたりこの十七日とその祥月命日なので、それ先に立ち古い川柳や狂句を通じて家康の生涯を振り返らせて江戸時代の殊に江戸の大衆が、家康を如何に批評して来たかを読みたいと思ふ。二三の代表的な句を挙げると

○日本でトラの子を生む鳳来寺

この句は家康の母君御懐妊と同時に三河第一の巨利鳳来寺の十二神將の本儀中、寅童子の一体が行方知れずとなつたので、家康は即ち右の寅童子の化身であるといふ傳説にもとづいたものである。

○御一生富士と間近く御上覧

家康は岡崎に生れ、江戸に壯業を樹て、静岡に隠居して終つてゐる。かくその一生は富士と間近く見て来たといふのであるが、その中に夜更のこめられてゐるのは云ふまでもない。

○九死一生早桶か御用立ち

家康かつて織田信長に敗れ岡崎在の大樹寺といふ小寺に逃げ、棺桶に隠れて危険からのがれ

たとい軍談により、九死一生と早桶をかけた句である。

○御扇手に風もあたぬ御代となり

五本骨の金扇は徳川家の馬じるしである。この扇子の馬標の前には今は天下も左びき伏し、密る風も無いといふ意である。

○是正に天か下知る御聖なり

家康の父清康、岡崎に在城の時、ある年の初夢に左の手に「是」の字を握ると見たので、同所の禪寺海道の横外和尚を召して夢占を命じ給ひしに是といふ字は日下人にて「君の御子孫中に正に天下を握る者ある瑞兆なり」と言上した。即ち後年家康を儲け正尊となつたといふのである。

其他右の如く一々歴史的背景から説明して感銘多き川柳講演であつた。

○雲南志火トトリ川柳見事

利本堂御物銀盃

瑞辰章入一個

金杯 一個

早大校友会より贈る

銀制衣大花笠

春成合を還席の祝賀に贈る

自家小銅像

同上

三ツ但銀杯

北城新報社より贈る

銀製香烟重二個

喜壽を祝して春成合を贈る

方アタ金時計 并金鎖

早大を賞して贈る

アラケナ制表十八石入腕時計

日清印刷会社より贈る

伊太利制衣大理石バンド

早大出版部より贈る

大隈克彦立像

早大より寄る

大隈克彦立像

銀アラケナ大隈克彦立像

紫檀制衣長方形雲版

大隈克彦の自遺物



銀製名刺

余の古柄を以て大隈克彦より贈る

金化銀杯三十箇十枚

大隈克彦夫人の死後継子より

自家用印

数十年前の内氏名の刺あり保る

○友誼遺墨

道遠遺墨

昭和二十九年五月の内是干一紙

小野梓書簡

大隈克彦の書簡の残片

岡山栲堂書簡

旗田庸平書簡

尾崎紅葉書簡

廣業寺書簡

繪紙

兩益書簡

大下凡山比所り込天乃了り
數百通

五峰母鶏五石歌

五峰集五石歌卷六画幅
三併り七双幅

五峰年鶏五石歌 一卷

朴源存余三定寄書詩幅

寺崎廣業十六雜漢幅 余の病中野々々

吉田樂浪余の別荘の詩幅

大震災記念書畫帖

坂口五峯大隈侯一言一行題詩

前吟の爪雞稿

吟爪枕上抱筆

以支朱批五峯詩草 二冊

五峯北洲詩法草 十冊



不律庵記

菊池晚香余の空箱の記

小轉庵

五峯余の書箱の序歌

紅雲山房

初六日家字余の空箱歌

家

○雜著雜纂

政治原論

余の皮書古版

詔爪衣

前吟男侍

隨筆十數行

版刻

日記

三十數年 紙債百冊程

雜錄

枚百冊

紅雲山房印譜

家尾印譜

自修印譜

自字本

古往別頭

日本仍書方

懐石文書

主上

家書選魂志刊

枚冊

○余の経歴、関係する出版物

●北風待話二冊

此待話と余の長巻と相い

五卷一遺稿

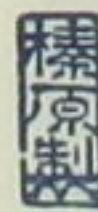
此の稿は余と余共の全の遺稿

五卷一遺稿

此の稿は余と余共の全の遺稿

荻村小稿

真時信誠の遺稿也余と共の遺稿



大隈侯八十五年史

此の編纂は五年を要し予

小野梓傳

此の稿は余の全の遺稿也余の遺稿

小野梓全集二

田原宗傳

岡山松本傳

山田一守傳天下の記者

豊城文集

此の稿は余の全の遺稿也余の遺稿

三野遺稿

此の稿は余の全の遺稿也余の遺稿

半峰若紙

余の稿を多く収めたり

大隈侯一言

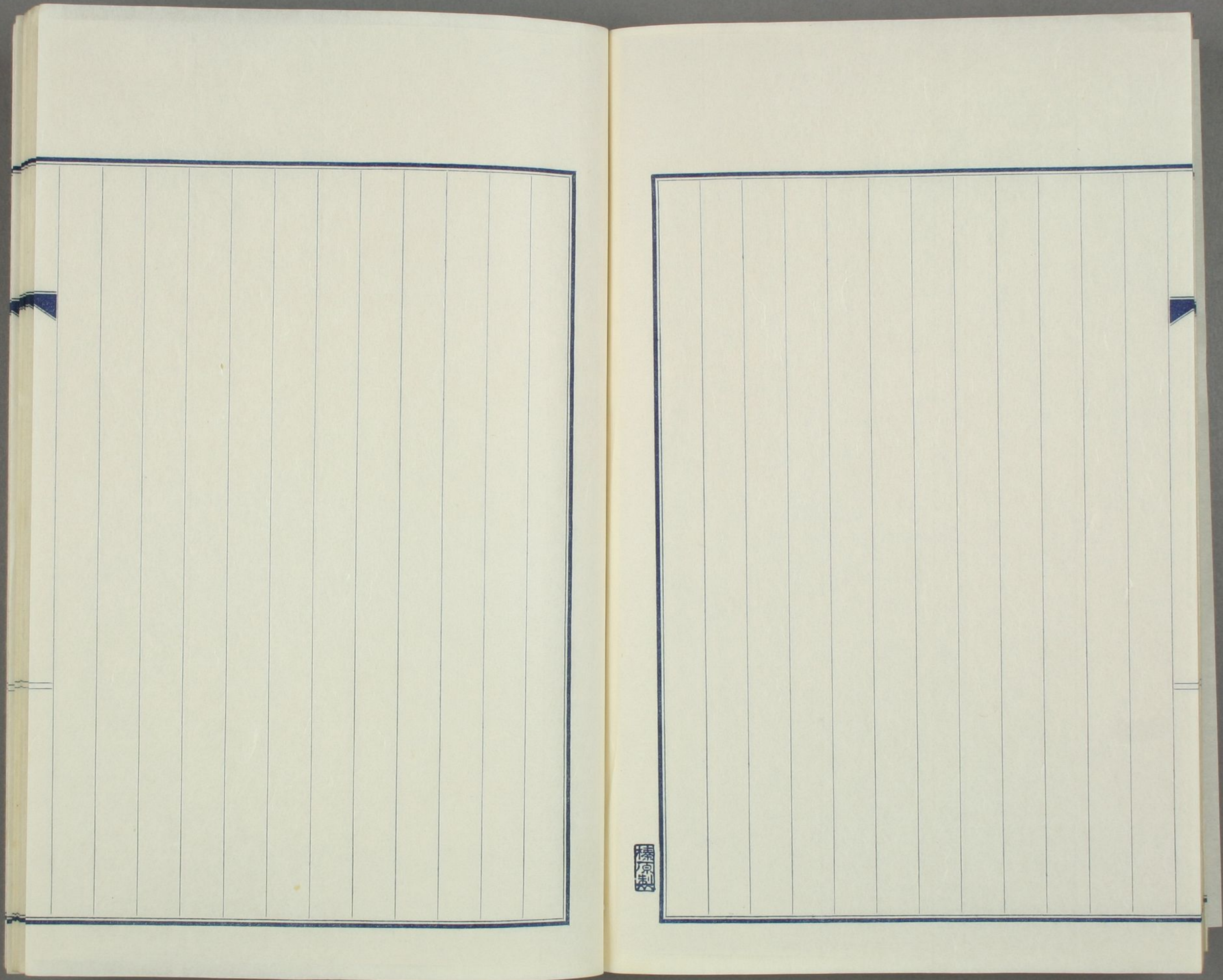
予の口授を以て撰録す

半世紀の早稲田

と答ふす、其日吾人の目と申す程意味を感する。流石と
 佛教のありては名張りとしも見るべき敬礼すの必要
 なる事と云ふこと也。印が國をの民族の今。やうなを
 金と知り多し、佛したる美術の心づかぬと云ふ人の
 ぬること也。印が人が絹物を用ひざるのの春と殺す
 ことを忌むかられと云ふ。印が牛の頭はくも、牛の骨
 づて牛の目やれを取つてあふ。牛の骨氣を取出して
 用ふ。羊が死ねば圓気が人々へけりたる肉を圓が其を
 三取んて湯にゆきしめてぬるやうな事也。丁が螺
 が何れかともいひ過ぎるとくると目をもめけるんことを
 坊にあると曰ふこと也。牛のやうにすはれむこと
 が印が氏よりけりてぬる評するん。仁丹王は



佛にも柔すぎたありれと見ても、佛多しと云ふ事
 院もいひ皆北王の往きむある。保くするす。彫刻を
 此種也のす。跡のぬきり。神尊の崇拝の為めむあつ
 たらふ。終開か、見る。或る生じたりすとや。これ時
 仁丹王の流し存してありてありことと云ふ。仁丹の
 印が、佛教に於ける。其流しと云ふ



漢文

以下
// 丁
白紙

日本最初の女學生

鹿嶋郡の女學生、小幡大助氏を校長に、明治
 行艦に創られた女學生、當時女學生として氣を吐いた御婦人たちが十五日正午から芝公園
 水交社に集まつて六十年の思ひ出に花を咲かせた、六十年のモダンガールも當る年波に凡そ
 七十歳を越したお嬢ちゃんばかり、銀婚の元日、鹿嶋夫人吉原米子（ふじ）さんが、工賑
 未亡人長谷川千代（ちよ）さん、我國女學生の先驅者、鹿嶋夫人吉原米子（ふじ）さんなど十人、お嬢ちゃんに
 がら特色をめでた夕刻披露した（島は右より長谷川千代（ちよ）吉原米子（ふじ）長谷川千代（ちよ）長谷川千代（ちよ）
 （五）柳原あや（あや）茶畑富子（とみ）黒田翠子（みどり）阿山とし（とし）三橋翠子（みどり）岡田鏡子（かがみ）吉原さつき
 （三）の老女學生）

茶事百談

これは浪華の鍾奇齋が書き留め置かれしものなり、我等が拙き筆のすざびより中々におかしく
 覺えたれば、其うちより百談を選び載すになむありける。

松井秋香識

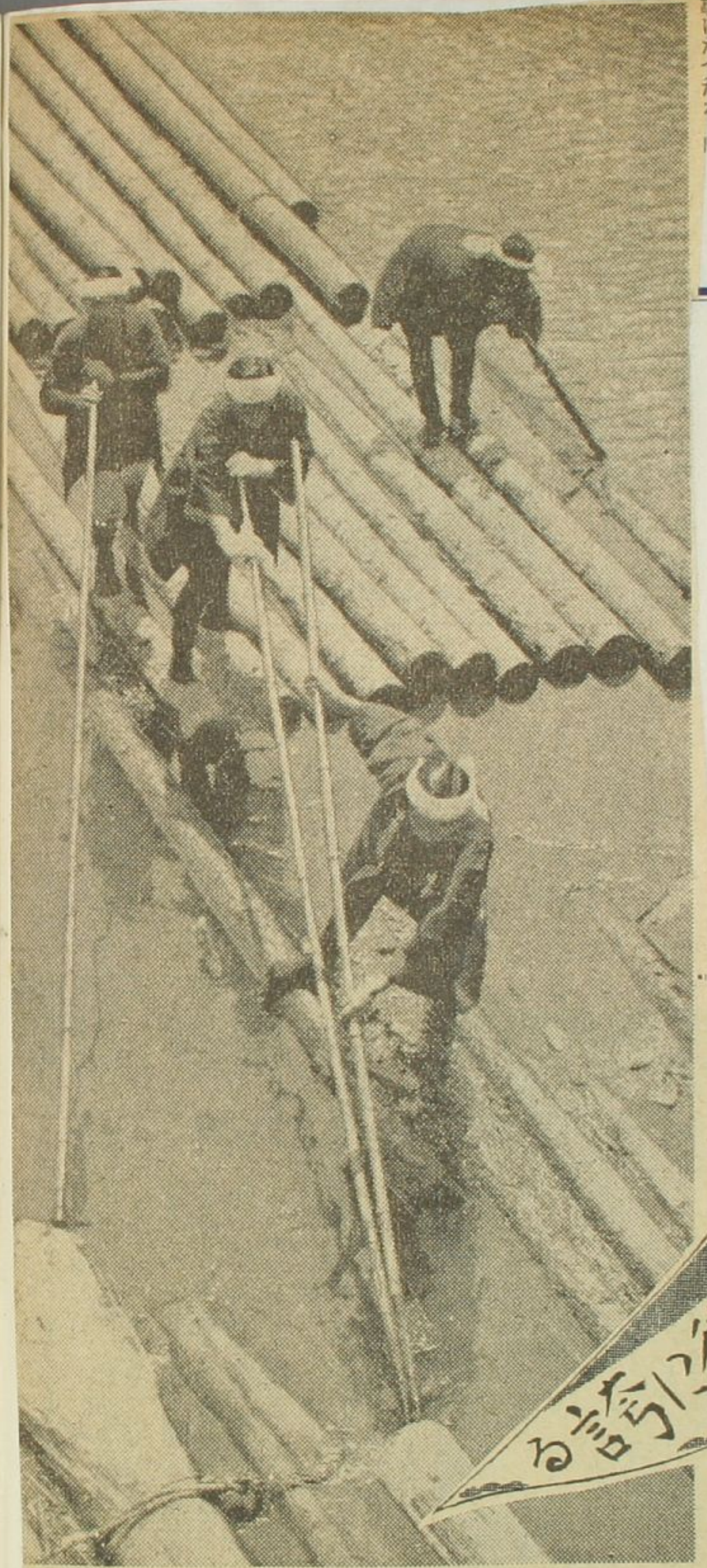
一 快からぬもの

快からぬものは、茶會の料理に骨多きもの喰あらしたる、爐中に白き灰の散りたる、數寄屋前に石灰土の無き、
 數寄屋の疊に酒染のある、茶席はもとより酒席へ老嫗幼子狎猫の出たる、喰ものなど與へて烏啼かせ打興したる、姫
 路草の古き烟草入席へ投出たる、足袋の黒き、茶のみたる跡へ道具やの匱品數々出したる、龜道具やの唐織の羽織着
 たる、道具や茶手前のそしり話、絹の衣類の垢つきたる、柱のきわなどに蜘蛛の網の残たる、水屋水壺に水炭取に炭
 のなき灰のかはきてけむりたつ、茶巾杓のくろきは尙更也、金物塗物に水のあと付たる、雪隠のさうしあしき、茶
 席に紙屑の残りたる、貧しき人の茶好、刻限過て客の不來、雪の茶の湯に客のわるきものが降たると云挨拶、上客
 茶の不案内の茶かりたる客組のあしき、雨中縁の下などに水の打てなき、紺足袋はきたる、尻切の露次草履、釜の
 湯の少き、丸爐に藁灰、花のくれ過たる、灰吹の不掃除、茶釜の穂の折たる、短檠の灯心の少き、會席八寸の隅に
 ほこりの残たる、にしり口のしきしめさぬ、烟管のつまりたる、茶湯初入の席中の寒き、出家の茶湯の會席食品を魚
 に似せたる、すべて料理加減のぬるき、會席の飯の黒き、見立物多き、茶湯爐の底の取様の不行届、書附もの多き茶の
 湯、龜茶の挽のあらき、大服なる楊枝のくるき、釜の金氣ある、土の盃或手造の土臭き、ふすまの立附のかた／＼鳴
 る音、手洗鉢の内の苔つきたる、湯桶の中に飯粒の沈みある、天井うらに鼠の走る音高き、銀かなもの多き烟草入、
 茶湯中の火事、炭を直して釜の煮へぬ、花入の花の落たる。相伴相客の病人、往來近き茶席、勝手の高笑、盲人の



朧月須度比翼伝碑

(展望帖より)



深川の自慢はなんといつたつて木場だ、どこを向いても材木ばかり、人の行くあとからは木肌の香りがゆれながら、温つて行く、木場三丁目の中央木材でこの自慢の根柢を洗ひたてると木場と切つても切れないのは五百名の夜師だ、内地はおろか海州、アメリ

丸太の上は俺の天下
木場のくかわなみく安さん

カ、南洋から逸々海を越えて来た丸太材や角材が本船から月島へ、さて此處から木場へ

街の語り

が悪い、先づ安さんで通る加藤安次郎さん、もつて住れたかわなみで五十余年をこの筏の上ですこしてゐる六十一歳の若者だ

俺の兄貴の録太郎だつて六十三の川並だぜ、親の代からさうなんだが、こつは腕脚・身体とりんぐに自然にのみこんで自然に出てくるんだよ

筏の上がこの人の住家だ、下駄で歩かうが足駄にしようが平地よりこゝの方が安心だといふ

俺達のやる角枝會でも見せてやりたいよ、丸太の上だけでは誰にだつてひけをとらない俺達は木場の川並なんだぜ

隅田川から遠くは埼玉の川口あたりまで肩と棒とで押して行くのだ、尺二上なら「平組」だし、尺以下の中目なら「ひつかけ組」に限るんだと話しながらも右肩でつゞける長かきには、手元からぐつと力が竹桿先のとび口まで傳はり夜はゆるく川面を滑るのだ、浪風で育つた俺達だ、浪風はおふくらみたいなんだぜと船頭がはりに強してゆく

諸國六十八景
哉後
養生法



傳之重

横濱製本

内地總人口

(確定數表發)

六千九百廿五萬

四千四百四十八人

年平均九十

長谷川統
計局長談



昨年十月施行の國勢調査の結果については取敢ず昨年十一月廿五日速報したがその後定人口の製表を急ぎ、ここにその結果を得たので内閣告示をもって廿八日の官報に公するの運びに至った。従前三回の調査ではいづれも翌年六月以後に確定口を公表したが、今回多少これを早めることが出来た。これは確定人口は府縣會、市區町村會の議員定数の基準となるものであるが、總人口から、内書して置いた部隊、艦船及び刑罰内の人數を差引いたものをもつて基準とするのである。さて今回の調査における内地確定人口は六千九百廿五萬四千四百四十八人であつてこれを速報に比すれば二千八百八十三人、即ち僅に百萬分の四十二の相違の増加である。實價は長谷川統計局長

内地總人口

昨年十一月一日 前回は昭和五年調査の六千四百四十五萬五千人に比すれば四百八十八萬四千四百四十八人即ち七分五厘の増加にして、一年平均増加人員は九十六萬八百廿廿一人、一年平均増加率は人口千に付き一四・四八に當る

Various advertisements and notices in a vertical layout. Includes text like '新', '大', '小', '中', '大', '小', '中', '大', '小', '中' and other smaller characters, possibly related to books or publications.

諸國六十八景

裁法
録生
法



信子画

標原

六千九百廿五萬四千八百人

年平均九十六萬人増加

内地總人口

確定發
表

昨年十月施行の國勢調査の結果については取敢ず昨年十一月廿五日速報したがその後確定人口の發表を怠り、ここにその結果を得たので内閣告示をもつて廿八日の官報に公示するの運びに至つた、從前三回の調査ではいつれも翌年六月以後に確定人口を公表したが、今回多少これを早めることが出来た、なほ

長谷川局長
談



であるが、總人口から、内書して置いた部隊、艦船及び刑務所内の人員を差引いたものをもつて基礎とするのである、さて今回の調査における内地確定人口は六千九百廿五萬四千四百四十八人であつてこれを速報に比すれば二千八百八十三人、即ち僅に百萬分の四十二の相違の増加である【寫眞は長谷川統計局長】

内地總人口

昨年十一月一日 此すれば四百八十八萬四千四百四十三人即ち七分五厘の増加にして、一年平均増加人員は九十六萬八百廿九人、一年平均増加率は人口千に付き一四・四八に當る、

府縣の人口

府縣の人口を見るに、各府縣中人口の最も多きは東京の六百廿六萬九千九百九十九人にして、大阪の四百廿九萬七千七百七十四人、北海道の三百六萬八千二百八十二人これにつき、兵庫、愛知、福岡の二百萬以上更にこれにつく、その他百五十萬以上は新潟、静岡、神奈川、廣島、長野、京都、鹿兒島、福島、茨城、千葉、埼玉の十一府縣、百萬以上は熊本、岡山、長崎、群馬、宮城、岐阜、栃木、山口、三重、愛媛、山形、岩手、秋田の十三縣、七十萬以上は大分、青森、和歌山、宮崎、富山、石川、香川、島根、徳島、高知、滋賀の十一縣、五十萬以上は佐賀、山梨、福井、奈良、沖縄の五縣にして、鳥取の四十九萬四百六十一人を最少とす、しかしてこれを昭和五年に比すれば佐賀の五千四百四十八人、高知の三千

都市の人口

昨年十月一日現在における百廿七市の人口は合計二千二百六十六萬六千三百七十七人を算し、全國總人口に對し三割二分七厘を占め、昭和五年當時における市の人口の二割四分を占めたるに比し著しき増加なり、この點に付ては東京の市域擴張ありたることに注意するを要す、右百廿七市中人口十萬以上を有するもの卅四あり、その中東京の五百八十七萬五千六百六十七人を首位とし、大阪の二百九十八萬九千八百七十四人、名古屋の百八萬二千八百六十八人、京都の百八萬五千九百九十三人、神戸の九十一萬二千七百七十九人、横濱の七十萬四千二百九十八人これにつぐ以上の大都市の外に在りては廣島の卅一萬五千八百八十八人を最も多きものとす、その他廿萬を越ゆる福岡、吳、仙台、長崎、八幡、函館、静岡、十萬を越ゆる札幌、横須賀、鹿兒島、和歌山、佐世保、岡山、金澤、川崎、小樽、堺、豊橋、新潟、濱松、下関、岐阜、門司、小倉、大牟田、高知の諸市順次これにつぐ、各府縣及び都市別人口数は昨年十一月速報の際掲載したるをもつて省略

集古
竹清輯

將棋さしのむだ口

竹 清 輯

石部金吉かな兜
はゝアの十三年
二手も三手も女夫じやと
へぼ將棋王取より飛車を大事がり
如何して九兩三步二朱
おどろき山のほととぎす
乙にからんだ垣根の絲瓜
王手栗橋古河間々田
頂戴針箱たばこ盆
感服揉療治
勝てば芍薬坐れば牡丹
角なる上は是非もなし
よわり名古屋は城で持つ
段々よくなる法華の太鼓
そうか門院の別當
そうは鳥賊の金玉
その手でお釋迦の團子こねた
そこだての地藏様

いちわる源太景季
はてなの種が百に三升
へたの考休むに似たり
つておけさの盆踊り
おも白しかしらも白し尾長鳥
おどろき桃の木山椒の木
おつと北野の天満宮
大違ひの鬼子母神
感心股くより
堪忍信濃善光寺
角とだにゑやは伊吹のさしも草
よい所へ鷺坂伴内
大丈夫かねの脇差
只取山のほととぎす
そうか越ヶ谷千任の先きだ
その手は桑名の焼始
そこだ源六茶の袴
そこで手洗ふ手水鉢

そうで有馬の水天宮
つまる八方外ヶ濱
やけの七ツの鐘を聞き
また負けの綱
負けて口惜しき玉手箱
なる程ちぎる初茄子
何にも梨の木さるすべり
桂馬の高飛び歩の餌食
歩の無い將棋は負け將棋
手が無いの次郎直實
敵もさるものひツ搔くもの
ありがたんばで晝寝して鷹にけられて目がさめた
あぶなやのお染さん
残念関子齋
三度に一度は負けずばなるまい
金桂あつて詰まん事なし
きたか長さん待つてたほい
仕方が無いと國からの状
仕方中橋神田ばし
ひどい目に拾帷衣ひとへもの
飛車道ゆんべばお楽しみ

つらい權八小紫
やけのやん八二人連れ
槍々御苦勞
まけまして御目出度う
むかし權現様逃げるが上手
何にも奈良坂般若坂
けんのん様へ月詣り
桂馬のふんどしはづされぬ
歩取り姐さん下谷に御座る
手の無い時端歩つけ
安心清姫蛇になつた
飴食つて地固まる
さア大變の大小柱曆
金桂鳥はからの鶏
金角寺の和尚様
きたか越後の紺がすり
四九十俵五人扶持
ひどい目に太田道灌
びつくり下谷の廣徳寺
すまないの次郎直實

國 寛 室
馬 道 園

